

大正六年度

創立十六年の春秋

三つの意味

今日は此の學校の最初即ち創立の時から盡力された大隈侯爵、澁澤男爵、廣岡夫人、三井夫人の御出席の光榮を得て、第十六年記念式を舉行するのは私共一同の歡喜に堪へぬ次第であります。昨年の當日は記念式に加へて家政館の定礎式を行ひ、私は病氣のため遺憾ながら定礎式には連なる事が出来なかつたが、其の後工事は豫定通り着々と進行して、今日其の落成の意味を含めた記念式を舉行するのは誠に感謝に堪へぬ次第であります。此の記念式は第一に吾々が其の起りを永久に——如何なる理由によつて如何なる働き犠牲を拂つて生れたか、その本を忘れぬために、第二は決して現状に甘んじない、油斷を生じないといふ事、第三には最初からの目的理想に向つて向上發展して止まぬ、即ち將來の希望を新たにするといふこの三つの意味を以て記念式をするものであります。

最も危険な時

さて省みればこの十六年の歴史に就いては非常に困難な時

機、及び種々經驗する時がありました。その表徴によつて善惡ともに大いに吾々を刺戟し、次第に健全な發達を遂げんとして居ります。而して其の歴史經驗に鑑みれば吾々の危険な時は、必ず盛んなる時、一段落を告げた時、勝利を得た時にあつたのであります。或古人の詩が澁澤男爵の床の間にかゝつてあつたが、それを私の言葉になほして見たのがこれであります。

成事毎在窮苦日 敗事多因得意時

これは家庭に於ても國家に於ても學校に於ても同じ事であります。其の團體の生命の危い時、又其の團體を破る恐れのある時は得意の時であります。如何となれば志を立てるには一心を捧げて誠意誠心事に當るが故に事を破る誤りがないが、得意の時には油斷が生じ易い。此の女子大學なども創立の當初に於ては一人として不平を懷き小言をいふものがなかつたが、然し幾分か出来上つて成功しかけて來た時には最も困難が伴つてくるのであります。即ち國家にしても戦争をしてゐる間は健全であります。勝つた時其の功勞者を表彰する時は一番國家の危い時であります。かゝる場合に不平が起り、小成に安んずる情氣が生ずるのであります。人間の生涯にこれ程危い事はありません。

ペスタロツチ先生の遺言

眞に教育のために一身を捧げられた彼の尊敬すべきペスタロツチ先生も、生涯心配を續けられた。棺桶に入るまで失望落膽して終つた人であります。かゝる熱心なる教育家が如何なる原因で失敗したかといふと、それは得意の時に弟子の間に小言が生じ利欲の争ひが起つてそこに缺陷が生じたからであります。而して最後までこの苦しみのために先生は奮闘したのであります。昨日の評議員會はペスタロツチ先生が弟子達を集めて棺桶を据ゑて遺言の演説をされたやうな感じがしました。大隈侯爵は八十歳、森村翁は七十九歳、澁澤男爵は七十八歳、廣岡夫人は七十歳になられる。何れも随分歳を重ねて居られるので今は頻りに前途を心配して居られるのであります。それに就いて新評議員久原さんは森村翁に後の事は御引受け致さうといはれたさうであり、奥田さんの言葉の中にもさういふ意味があります。私も永久死ぬる事は考へないが、段々年寄の仲間に入らねばならぬ。それを思ふと現状及び過去よりも後の事百年千年の將來を思うて心配に堪へない。私はペスタロツチ先生が棺桶を据ゑてその弟子達に言はれた言葉を今そのまま諸子の前に告げたいのであります。

「舊年は去り新年は來れり。今余は諸子の間に立てり。諸子は余を以て喜びに充てりと思ふならんも、余は胸中一の喜びなく、只余の終りは近づけりと考へらるゝ事頻りなるのみ。

「今余が頭上には天よりの聲響く『神の僕は其の職務の報告書を出せ』と。余は完全なる報告書を奉るを得べきか否か、又余は神に對し人に對し自分に對し忠實なりしか否か、余は幸福なりや、余の幸福なりと云ふ聲は蜜蜂の翅の如く響く。余は今死なねばならず、然れども余はその幸福をうくるに値せず、故に余は幸福ならず、過ぎ去れる年々は幸福なりしも、もはや歩まんとする途上の氷は解けたり。余の天職は早くも失敗に歸せり。互の關係を結べる最も強しと考へたる結合力は最も弱かりき。余が救はれんと思ひし事は全く滅亡に歸し、平和ならんと思ひしは偽りにして、慈愛は實に冷酷なりき、……余は誠にあはれる謙遜なる不徳なる價値なき無能無知なるものなりき。然し自らの力足らぬにも關らず仕事に猛進せり。世の人は狂氣と嘲りしも大神の手我と共にあり。而して余の事業は榮え余と余の事業とを愛する友人を得たり。然し余は爲したる事を知らず、余のために何が必要なりしかを知らず、然れども余の事業は無一物より榮ゆるを得たるは、恰も天が渾沌の中より天地を創造したるが如し、これ余の事にあらずして神の仕事なり。願

はくば神の働きによりて吾々の新たなる結合を計り給へ、その結合は悪魔の使の如くならず天使と天使との一致の如きを望む。余往年虚弱の體を以て馬の危難より逃れしを不思議に思ふならん、其の不思議にもまして不思議に余の事業の保護されん事を望む。余は間もなく死するも、今日のこの言は永く諸士の胸中に生命あらしめよ。友人諸君、余の生涯に於て失敗せる仕事は、諸君によりて遂げられん事を望む。諸君は前途の障害物を除き、余の失敗に顧みて、其の轍をふむこと勿れ。諸子よ外面的成功によりて欺く勿れ。諸子は實に重大なる犠牲を要求されつゝあり。何事も犠牲を待つて始めて完全に發達するものなり。現在の喜悅名譽は野にある草の如く凋み、春咲く花の如く散りうするものなるを忘るべからず。」

と、かくベスタロツヂ先生をして失敗せしめたのは人間の弱點であります。困難のある時は一致共同するが、少し成功すると内に互に功を争ひ、外に嫉妬心が起つて、その事業を根柢より破壊しようとする、之が昔より一番人間の危険な缺陷であります。私共が先輩の御扶けによつて漸く基礎を築いた曉に、内に油斷を生じ小成に安んぜぬ様に茲に覺悟を定めねばなりません。

（「家庭週報」第四百十四號・創立記念式上にて）

大正六年四月

女子大學創立の由來

帝國ホテルに創立發表會を開く

日本女子大學校が我が國にいよいよ一つの組織となつて生れ出たのは明治三十四年四月廿日、今から十六年前の丁度今頃であります。之がとりもなほさずこの學校の誕生であります、併しこの誕生よりも尙遡つてもう一つ以前の誕生日ともいふべき時があります。それは今から廿年前即ち明治卅年の今頃始めて女子大學創立の發表會を開いた時であります。この時は帝國ホテルに於て貴衆兩議員を招待してこの計畫を天下に普く發表したのであります。當時はまだ評議員といふ名義はなく、今日の評議員の方々は創立發起人の名を以てその衝に當られたのであります。その當時大隈侯や澁澤男、森村翁等はまだ六十歳前後の何れも壯なる御年配でありました。其の他の方々、時の總理大臣伊藤公、文部大臣西園寺侯等何れも國家の元勳として政治界に將た實業界に於て國家發展の爲に盛んに御活動の時代に於て實に多忙を極めて居らるゝ方ばかりでありましたが、其の多忙の中に尙國家百年の計たる我が國女子教育を養ひ育てん爲に其の衝に立ち今日迄過去廿年變る事なく熱心に御盡し下

さつたその結果として今この女子大學を見る事が出来るのであります。斯くの如くにして漸く茲に女子大學の永久發展の基礎を建設するに至つたことは我々一同の深く喜ばねばならぬこと、同時にこの元勳たる人々に對して感謝の念に堪へない所でもあります。然るにこれ等の方々は今日既に八十歳の高齡に或はそれに近い年齢に達せられ、その勇氣に於ては尙壯者をも凌ぐるゝ勢ではあります。尙前途百年の慮りに備へ、女子教育永久の進歩發展の爲に、今日の女子大學の基礎だけを以て安んぜられない。さうして茲に人格あり手腕ある少壯有爲の方々を選擧して其の後繼者を立てられたのであります。即ち奥田義人、久原房之助兩君は今回この頼みを容れ新たに本校評議員として其の任に當ることを承認され、今日はその披露式を舉ぐる次第であります。

誰も知る如く奥田市長は日夜を辨せず公務に御多忙なる方であり、又久原さんの如きはこれも大方の人々の知る如く、現代實業家の覇をなして、我が國に於ける未曾有の大經綸を以て世界に向つて我が國の實業發展の道を講ぜらるゝ方であつて、其の日常の寸暇も貴重なる時であつて、而も寸暇もなく多忙な方であらるゝにも關はらず、茲にこの請ひを容れて我が評議員としてわが女子教育發展の爲にこの重任の後繼者として御承認下

さつたのは如上の先輩の切なる願ひにも依りませうが、又もとより我が國將來の爲に、日新文化の進歩を計る爲に、その根本事業たる女子教育の一日も忽せにすべからざる事を御認め下さつたのに依るであらうと思ふのであります。

我々はこの先輩の御配慮に對し、又この少壯有爲の方々の御承認に對して、實に感激措く能はざる所のものであります。同時に我々一同も亦各自に責任を省みこの大使命を果すべき決心を益々固くする所がなければならぬと切に思ひます。

〔家庭週報〕第四百十四號 大正六年四月

新學期に於ける學生の新生活

重要なる新學期

今期創立第十七年の新學期を迎へました本校に於ては、實はさまざまの新しい事件が開始されて居るのであります。第一、學制年度の改革のこと、それから家政館の落成につづいてその開始されたこと、これ等に件つて起るこの他の内部傾向の變化といふやうなことを考へて見ますと、實に今學期に至つて日頃を増して一種の希望ある傾向が見られるやうに思ひます。併し學校の過去のいろ／＼の歴史をあまり多く知らない新入學生に

とつては、この學校に新しく起つた傾向や、又この學風に就いて、日頃の新人學生の場合以上に、又日頃の新學期の心持以上に不審の起る點も多かつたこと、察して居るのであります。

生活の變化

それは先づ入學早々、課業に落着くことの出来なかつたといふことが第一に擧げらるゝことであらうと思ひます。それは以上の理由で例年よりは前學期の終業式も十日許り延び、從つて始業式もいつもより遅くなりましたが、それについては今學期は例年七月十日の終業式を、今年七月二十日にしてそのうめあはせがつくわけになつて居りますから、さういふ方面からの不審はだん／＼と解つて來るでありませうが、併し茲に私はその日取が順々に先きに延びたといふことだけではなわけ、其所に重大な意味のあつたことに就いて話して置きたいのであります。といふのは、今年の新人學生の始業式前一週間ばかりといふものは、それ等の學生が今後本校の學風を學び、その實際の學生生活を營むについて最も重大なる課業をして居たのであつたことを自覺するやうに希望するのであります。

教育の眞價

即ち本年の學制改革について、學生は新舊を問はず各自その專攻課目の選擇を更に熟考し、將來の目的方針を定め、さうして自分の日常の課目を編成し、その學習の方法をも選擇する必要が起つたのであります。これは本校の學生生活をする者にとつて最も必要なことであります。殊に新人學生が今後大學生活に入るについて最も慎重に考へねばならぬことであります。今年始業式前の一週間はさういふ學科目以外の、否各自がこれから始めようとする課業の重大なる準備課業に集中したのであります。それから又、その次ぎに考へさせられることは、この學校の校風たる各學部の關係及び生活の共同といふやうなことに於てあります。この新生活に入つて、その眞相を學び、その關係を了解するといふことは、先づこの學校の歴史、即ちこの學校の校風の經過を知らねばなりません。その古い歴史を一貫してこゝの學生の生活を支配して居るところの思想は何であるか、又それはどういふ階段に於て發展して居るか……といふやうなことを先づ初めに於て了解することが必要であります。そこでこれも矢張り課目以外の場所に於て學ばねばならない大切なことであります。それには本校の主義や本校の歴史を見るに適當なる書物や雜誌を繙いて見たり、又は諸種の會などが催さるゝやうな場合に於て、其所に生きた經驗に接し、生

きた校風に接することが最も本校を了解する扶けとなるものであつて、斯うした無形の課業、精神方面の學風といふものは、課業以外に學ぶ場合に於て知らず／＼學生の生活がこの校風に成長して來て居るものであります。

選擇制度の利害

世の中には教育といふことを、本を讀み先生の講義を聞くことのみにあると考へて居る人もあるが、それは間違つて居るといふことは、今茲にいふ迄もなく大學生活について経験した人々には了解出來て居ることであらうと思ひます。がこゝに、大學生活といふものゝ精神を最もよく了解して貰はねばならないことは殊に今度の學制改革についてとあります。即ち選擇制度又は部門制度といふことについて、これを實行する學生が最もこの制度の眞價を了解する者でなければならぬのであります。

我が國に於て嘗てこの制度を試みた某大學もありますが、どうも成功しなかつたといふ。其の經驗ある學者について不成功の原因を聞きますと、それは一に學生の態度に歸するものである。我が國從來の教育の弊は學生をして注入的、奴隸的態度に慣れしめた。それ故學生は自分から心が動いて學問をするとい

ふのではなく、従つて眞理の爲に學問を探究するといふやうな態度ではない。どこ迄も計算的で、どこ迄も他動的に爲さしめられてするといふやうな極めて不眞面目な態度であつた。その外に又困難なことは、まだ我が國の學者といはるゝ學者が、世界の先進國に於ける大學教授の如き經驗を持たないこと、これが又甚だ六つかしいこと、不成功の原因であるといふことを聞きました。今私共がこの選擇制度を實施するに於ても等しくこの困難を豫想しないでもないのであります。

先驅者か失敗者か

それでは他に我が國教育の改善の道があるかと言へば他にはもう道はない。我が國の婦人の生活を改める道が他にあるかといへばそれももう此の他にはない。たゞこの道を拓いて行くより外はないのであります。困難でも致し方はない。さう云つて永い間校風を養ひ、學生の態度を育てて、さうして今日漸くいよ／＼これを實行する段取りとなつたのであります。これはとりも直さず我が國教育界の新しい試みであつて、幸に成功すれば先驅者である。けれどもその態度如何によつては或は失敗の犠牲者となるものであるかも知れないことを覺悟しなければならぬのであります。

背水の陣を布く

それ故今これを實行するに當つて六つかしかつたならば止めようなどいふなまぬるい覺悟ではならない。背水の陣を布き、生命にかけて運命を賭してもこれを成功せしめずんば止まない覺悟を決めてかゝつたのであります。若しこれが出來たらば當に我が國の女子教育のみでなく、我が國の國民教育にも一大基礎を築くやうなもので、又各個人にとつては無限なる價値を見出すのでありますから、いよ／＼この制度實行の新學期に入りては、その教員と學生たるとを問はず相扶け相共同してこの目的を遂げるといふ覺悟を先づ切望するのであります。

生命を育てよ

選擇制度又は自動主義教育といふことは前にも述べた通り、男子に於てすら實行し難いことをどうしてそれよりも未だ遅れて居るといふ女子教育に於てこれを試みるものが出來やうか、それは學生が如何に又學校が如何に覺悟を決めた處で、到底この方法が成功するといふことは覺束ないことではあるまいかと疑問を起す人があるかもしれない。併しそれは極く皮相の觀察であつて所謂闇の中に手さぐりをして居るやうな人々のいふこ

とであります。成程難事は難事である。併し一度其の眞の價値が了解出來れば即ちその實際が含み込めさへすれば、この選擇制度といふことは決して難事ではないのであります。従つて決して不成功に終りはしないかといふ杞憂もない。實に最も實際的な最も容易な方法であるのであります。

キンダー・ガーデンの意義

今度のこの學制は下幼稚園から上大學部研究科迄を通じて、系統的に又共同的に實行し得る方法であります。そこで先づこの幼稚園といふことの意義について一言いうて置く必要が起つて來たのであります。一體幼稚園といふ事は英語でキンダー・ガーデンといひますが、このガーデン即ち園といふことに深い意味があるのであります。

園といふは自然界を意味するのであつて、この自然の世界の土の中から生ひ育つ生命即ち草木が自然界にはぐまれ育つやうに、人間も亦この自然界に生れた一つの生命であつて、この生命は矢張り草木と同じやうに自然の園に生長して行くのであります。學校といふことを學園又は校庭といふのは矢張り生命を育てる園といふ意味から來たものであります。

宇宙の生命と合致する所

そこで大學を「ユニバーシティー」といふが、この「ユニバーズ」といふ語は宇宙といふことを意味して居る。即ちもつと廣い深い普遍的永久的の宇宙の生命の中で育つて居るのがこの「ユニバーシティー」である。それ故大學といふ事はこの建物に限られて居るものではない。又圖書館の中に藏められて居るものでもない。化學館の機械や道具の進歩した設備を以ていふ名でもない。即ち大學の生命そのもの、價値をいふのであつて、大學の生命とはその宇宙の大生命の中に育つて居る生命即ち宇宙の大生命と人間の生命と合致する所のもの、それが大學の生命であります。教室や講堂はこの生命を育てる爲の研究所でありませぬ。

大學は研究所

今迄は大學は教場であるといふ意味に多く解せられて居りました。即ち教へる場所として居たのでありますが、今我々のいふ大學はその教場ではない。即ち研究所である。人間が眞理を探究し眞理を發見して行く、さうしてそれによつて生命の光りを増して行くのでありますが、大學は即ちこの眞理を愛する研

究心を養ひ育てる所の研究所であります。故に研究そのものが養ひ導き行くところの生命の乳母であり、保姆であります。これが即ち幼稚園と共通して居る所であります。

それでこれからは、唯學ぶといふことが本體ではない。獨りで考へること、自分で研究すること、自分で理想を構成すること、自分の心に念願することを自分で成し遂げること、これが大學生活の本體であります。故にこの本體はどうしても研究所でなくてはならぬのであります。この本體即ち精神は幼稚園から小學校、高等女學校、大學に至る迄凡て一貫して居るところの自動主義教育の本體であります。

選擇制度實行の第一歩

そこでこの自分で考へ自分で意志し自分で活らくこの精神を養ふに今度の選擇制度は最も適切なる方法でありますが、その選擇は例へばたと規則書の中から甲の學科と乙の學科とを組み合わせることで自分の時間割を編成するといふのではなく、それは眞に自分に徹底し、眞に自分が望み慕ふ所の熱心なる要求態度によつて編成されてこそ始めてこの制度の實行に入るのであります。

それで先づこの制度に必要な條件ともいふべきものは自念

といふこと、又自動といふことであります。人間の生命は、園に芽を出した草木と同じであつて、其の根本には宇内的に大生命をうけて居る、その生命の生長はそれ自身の根本要求であり、又宇内的自然の根本要求から活らぎかけられて居る所のものであります。然るに例へば草木の生長は之を培ふ者の力の如く、又美しき花は園丁が作るものかの如く考へる者があつたらそれは大變な間違ひである。それと同じく人間の精神の芽を育て、居るものは決して教師や又學校の制度ではない。それは内から展び出でんとする力、自然から與へられたその宇内的の生命であります。教師や學校制度はその生命の發露を妨げぬやう、その發展を助くることを日夜に努める保姆役であり園丁であります。園丁は庭木や草木や草花の根に水を灌ぎ、蟲を除き、その草木の生命を保護し、その生命を助けることをするのではあるが、眞にその生命を育て居るものは眼に見えぬ力、即ち宇内の生命と通うて居る所の偉いなる力であります。

選擇は自然の傾向

従來の教育制度は屢々これを誤つて人工的に作り上げんとし、又人爲的に速成せんとして、さうして常に失敗したのであります。今この自念自動の生活に重きを置く選擇制度は即ち

生命の畑に植ゑられた人間の自然の生長を扶け導く最良の生活法であります。

庭の千種は、同じ土の上に出で、同じ光りを受け、同じ熱を與へられて而も色さまざまに咲き實のるが如く、人々の各自の特性は同じ境遇に在つても、其の要求の傾向によりてさまざまの要素を蒐めてその人格を構成して行く、其所に各自の要求が自然の傾向に従つて行はるゝ時、眞にその特性の發揮が見られるのであります。又各自特種の人格が築き出さるゝのであります。

故に宇宙の生命は悉く選擇制度に生活して居るといふことが出来るのであります。さうしてその選擇について眞に考へ、眞に宇宙の大靈と合致せんと要求するその態度は人間に於てこれを祈りの生活といつて居ります。即ち一向不退に念ずる心の状態であります。之が信念であります。

信念とは即ちこの熱のある人、この一向不退に念ずる人の生活に於て初めて見るものであります。さうして選擇といふことはこの熱の働く人、その念ずる人を以て即ち非常なる自念力が動いて來て、さうして初めて眞の選擇が出来るのであります。

故に選擇制度は言ひ換ふれば自念の生活即ち信念生活の土臺の上に行はれるものであります。この深い動機の上に行はるゝ選

擇は即ち自然の傾向に従つて眞に宇宙の眞善美を實現せしむる力となるのであります。

大人格に對する憧憬の念

たとへば、科學を學ぶものはこれに依つて天地の眞理を見出さんとし、人生の歸趣を探らうとする。又文學を修むるものはこれによりて宇宙の靈に觸れ眞の生命に生きようとする。其所には各自の道に向つていふべからざる憧憬の念が湧く。これ即ち人間が宇宙の眞を愛しこれを考へ求めるところの根本要求ともいふべきものであつて、實に哲學は其の産む所の子供である。

さて、その求め愛する宇宙の眞理と、さうして又自己の中なる眞理とが相合體しようとする其所に人間の祈りといふことがあり、念ずるといふことがある、といふことは前にも述べた通りであります。實にこの信念、この熱心がなければ眞の意味の「ものゝ選擇」といふことは出来ないわけであります。この非常な自念力、言ひ換ふれば進んで止まない願ひの意志があつて初めて有效なる選擇が出来るのであります。即ち自發的活動の起る所に選擇制度の眞意は行はれるのであります。故にこの制度は眞に自然の傾向であつて、この制度の行はれる所には人

間生活の眞意が行はれ、人生の力の發展といふことが行はれるのであります。そこで教育といふことの眞意も亦この意味の力の發展、この意味の生活の實現に外ならないので、大學生活とはとりも直さずこの生活の實現であるのであります。

大學生活に入る署名

それ故大學生活に入る署名といふことはこの信念生活に入る署名であつて、今より自發的活動の生活、今より宇宙の大生命と共に生き、共に成長することを自覺し選擇決定した意味の署名でなければならぬ。この生活の指導者は眼に見えぬ宇宙の大靈であります。即ち宇宙の眞髓、宇宙を創造するところの大いなる宇宙の意志——或人はそれを眞如といひ、又或人はそれを神とよぶ——その無形の大人格であります。この大指導者の感化を受け、その大意志と相交通して居る。其所に我々人間の生命は成長して行くのであります。

この大指導者は日夜を分たず人間の生命をおとづれて行きます。たとひ人間がその外面生活に眩惑し、その大生命との交通を意識しない時でも、或は又忘れて居やうとも、大生命は人間の衷なる生命の願ひを忘れず、衷なる生命は大生命の暖きふところを慕うて常に無形の生命の交通をなし、無形の精神の指導

をうけて居るのであります。この無形の指導者、この眼に見えぬ、併しながら行住坐臥に何ものか自分を導くところの大生命のあることを認めて、その生命に加はり、その精神と共に生きて行くといふことが即ち今茲に實現せんとする大學生活そのものの、集中點であります。

實際生活と別ではない

それ故この傾向は決して今に於て新たに出來たものではないのであります。選擇制度開始と共に始まつたもの、やうであります。實はさうではなく、久しい前からの凡ての人間の根本要求なのであります。選擇制度は今その正しい動機の土臺の上に、將さに美しい理想の生活を選択實現しようとして居るのであります。さうしてこの努力は實に堅實なる土臺の上に築かれつつあるのであります。又この傾向は決して一時的のものではないのであります。なぜならばこの要求は、永い間經驗實行した實際生活に依つて、どうしてもこの方法でなければならぬ、この道より他に進む道はないことを信じて選んだ唯一つの方法であるからであります。

〔家庭週報〕第四百十七號、四百十九號〕大正六年五月

人格の底深く流るゝ思潮の源流を養へ

若し肉眼をもて見得るならば

思潮の流れを若し肉眼で見ることが出來たならば——又肉眼で見えたと想像して考へて見るならば——その思潮の波動は、この人から彼の人に傳はつて變遷する状態を目標することが出来るであらうと思ひます。

つまり思潮の流れと云ふことは人格から人格に、この人から彼の人に波動して行く精神の活らきをいふのであります。その活らきがいよゝ強くなり烈しくなつて來る、それを肉眼で物質上の變化を見る如く、靈眼を以て直觀的にその活動を感知するといふことは出來ないことではないと思ふのであります。そして、その波動をうけて居る人々の間には、根柢に於て共通の動機、共通の性質、共通の性格の流れが通つて居ることを見るであります。諺に、同氣相求む、といふ言葉があります。又牛は牛づれといふことがあります。その諺は矢張り眼に見えぬところの大生命の流れがあつて、その同じ流れに入つて居るといふことをいふのであります。その同潮流の中に感應して居るものはその人格、動機、傾向、性行に於て相一致して居ると

ころがあるのであります。

昔から、善でも悪でも、友を惹くといふ言葉があります。一家に不幸があつた場合には、又再びその家族に不幸が續いたり病氣に罹つたりすることがあります。——又精神病などに罹ると大神がついたといふ。自殺などする人をさして死神につかれたといふ。——さういふやうなことは矢張り人々が友を惹きはしないか、死神につかれはしないかと思つたり考へたりして居ることが自然と同類を惹くことになるのであつて、即ち人々の思想は日夜にその傾き性行を作つて、それは必ず同時に、世界に流れて居る同じ思潮の間に引きつけられて行くのであります。即ち下劣な思想は下劣な思潮を惹き、わが傾向と社會のこれに類似する風潮と相合して我が動機、性質、人格が知らず知らずの間にその流れに俗化されてしまふのであります。

これに反して、わが心即ちわが思ひが世の中即ち世界宇内の善意の潮流に飛び込めば、我が意志は自らその善意志と同一化するに至るのであります。つまり私共の日夜に考へて居ること、思うて居ること、殊に心深く自念して居ることは、必ずや宇内の同潮流を引き相合するのであります。その思潮の傾向によつては或は健康にもなれば或は病氣にもなり、徳ともなれば惡ともなるのであります。それ故思想はその人格の創造者であ

り、又團體の創造者であります。それはやがて一校の校風を作り、一國を創造し、世界を創造するものであります。

故に若し人々が數名相會する處には必ず一つの思潮を作るのであります。若しその時の傾向即ち話の向きが消極に傾いて、或は人の缺點を噂し、又は自分の不平や失敗や困難や、その他面白からざることを語り合ふ仲間であるとすれば、其所に作る、思潮は必ずや濁流であります。その濁流は又社會の大濁流と合して其所に悪い傾向を助長して自らこれに耽溺し、又人もその罪惡の淵に招き寄せるといふことを活らいて居ることになるのであります。即ち人々が語り話すことは必ずや先づその仲間の中に一つの震動を傳へ、さうしてそれと同じ氣分を起し、同じ空氣をつくり行くものであります。獨逸人が敵を苦しめる爲に毒瓦斯を作るといふことがあります。我々が若し惡傾向を作るものであつたならば、矢張りそれと同じく毒瓦斯を以て正義の人を苦しめるといふことになるのであります。

身邊を流る、二潮流

そこで、私共の希望すること、自念すること、計畫することの成功を願ふにつき、これが成功又は失敗の結果を作るについても豫めその原因となるべき傾向といふものは決つて居るので

あります。私共自身の兩側には二つの潮流が流れて居ります。その一つの潮流は成功、成就、満足の潮流であつて、他の一つは失望、失敗、意氣銷沈といふ潮流であります。この第一の積極的の潮流のもう一つ原流に遡つて見ると、其所には勇氣、忍耐といふ流れがそゞぎ込んで居ります。今一つの方即ち失敗、失望の原因となるものは恐怖、狼狽、心配、憤怒等といふ消極的の方面の流れがそゞぎ込んで居るのであります。

私共は今その勇氣といふ積極的思潮の原流を辿つて行かなければなりません。勇氣といふことは、自分の心が自分の内に主人として存在して居ることをいふのであります。自分の心が自分のすべてを支配し、及びその自分の四圍の境遇を支配する力が「勇氣」といふ力であります。昔からいふやうに、若し自分の心が自分以下の自分を制禦することが出来るならば、その人は最も勇氣ある人といふことが出来る。自分以下の自分とは自分の卑しい狭い感情を云ふのであります。卑しい狭い感情とは恐れ、疑ひ、狼狽などゝいふ感情であります。狼狽といふことはやがて怒りとなり、失望となり、意氣沮喪することになるのであります。

そこで人間が凡ての活動をなす原動力はこの勇氣即ち自分といふ主人が自分を支配するのであつて、いひ換ふれば私共の仕

事の結果の程度は必ずこの原動力の程度によるのであります。この力の強い人、又この力の發展する人は必ず進歩發展する人であり、その人の仕事は益々効果が擧がつて來るのであります。

修養の道程

私共の力の淵源たるこの勇氣を養ふといふことは積極的思潮の本を養ふことであり、又その流れを汲むことに努めることであります。つまり、眼に見えぬ思潮の開拓につとめることであります。その根本力の養成涵養の方法は何であるかといふと、即ち瞑想をする、又は考へるといふことであります。

つまりその考の善悪が、私共をして宇宙の流れ、即ち宇宙の大思潮大勢力に密接の關係をつけるところの道を開くのであります。言ひ換ふればその道程が考へることであり、思慮することであり、瞑想すること、自念することであります。

この考へるといふ道程を通つて、私共は如何なる所にも歩を進め、如何なる高所にも向上進歩し、又如何なる祕密の世界にも入り進むことが出来るのであります。その道を講じその力を養ひ、その生活の術を學ぶのが人間教育の眞髓であります。さうしてその深い力が組織的に發展して永久に流れて恰も大河の

奔流の如く勢を呈して来るものは、即ち我々の内なる良習慣良品性であります。この良習慣良品性が調和統一してその人の性格或は人格を創るのであります。

そこで私共は如何にしてこの根本要求を實現することが出来るか、言ひ換ふれば如何にして凡ての境遇に於て勝利を得ることが出来るか、又如何にして常に理想目的を實現することが出来る力の自由を得るか、又如何にして我自分を制禦することが出来るかといふことは、如何にして勇氣を養ふかといふことに歸着するのであります。ところが私共人間の日常は、或時は非常に勇氣に充實し向上進歩の道を歩いて居つても、又或時は脆くも誘惑に陥り失望落膽の淵に沈みます。それは人間の修養の道程に免れることの出来ない道行きであつて、誰でもこの苦しみは必ず屢々經驗するのであります。併しその人が我に立ち歸ることを忘れさへしなければその誘惑には必ず勝つことが出来るのであります。その故に佛者の所謂、「折々に觀念の溝を浚へよ」といふが如く人の修養のまだ浅い時代に於ては、矢張り、何か其所に一つの表徴を作り、それを見ることによつてその修養を思ひ出すといふことが必要となつて来るのであります。

目に見えぬ戦争

曩にも述べし如く、生命は恰も大河の如く大潮流をなして流れて居る。人は終始その潮流について離れず逆流せずして進む事が出来て、始めて眞に向上の道を辿り修養の道程を進めることが出来るのであります。この勇氣ある態度即ち修養者の態度は所謂生ぬるい態度では保ち得られないのであります。つまり人生は矢張り善と惡との戦争であつて、その善が常に惡に勝ち、常に勇猛なる態度を保ち得るには勇猛なる修養が必要なのであります。誰でも若しその肉眼を以て今日のこの精神界を目撃し能ふならば、その生命の流れの勇猛なる勢を見ることでありませう。其所には眼に見えぬ宇宙的意志があるのであります。即ち我々人間の生命の流れがあるのであります。この宇宙的意志と自分と、言ひ換ふれば宇宙の大思潮と自分といふもの、思潮傾向とが相一致し、相調和し相感應し、相震動することによつて修養の向上が出来るのであります。善が悪に勝つことが出来るのであります。この故にこの大潮流即ち無限絶對の善意志に向つて突進する勇氣、その道程の修養が必要になつて来るのであります。

人生の自由と制限

生活の目的

人間が生活の努力を積んで行くといふことに若し其の目的が外れて居ては其の努力は無効になつてしまふ。私共は先づ生活の目的を定めなければならない。

今私共の生活の目的は、「自我發展」或は又「理想實現」(國家、社會、人類の理想實現)といふ言葉を以つて言ひ表します。尙今少しこの内容ともいふべき要素を擧げて申しますと、その第一は健康の増進であり、第二は精力又は能力の發展(主として知力の方面をいふ)、第三は精神力の發露伸展(即ち人格價値の向上)であります。

それでこの目的を成就せんとするには、先づこの問題についてのこれ迄の失敗の原因を研究してその病源を見出し、今後の治療改善法を講じなければなりません。それはとりも直さず成功成就の原因となり要素となるものであります。さて、この目的に向つての發展の土臺は現實の自分といふものであります。そしてこの現實の自分といふものには二つの傾向が流れて居るといふことを忘れてはならぬのであります。即ち過去の成功の

經驗と過去の失敗の經驗とであります。言ひ換ふれば自分自身の内に積極的傾向と、消極的傾向の流れのあることであります。この過去の經驗の成功失敗といふ中には人間の天賦の能力といふことも含まつて居れば、又社會的遺傳即ち境遇から來る所の力、又それによつて自分で拵へた所の習慣傾向といふものもある。これは私共が、過去を考へて我が根本動力の如何なるものであるかを知るに當つて大切な研究であります。人間はこの兩方面の經驗を自分自身の習慣にも亦社會的遺傳にも持つて生れて居ります。それ故私共が今後自己の發展するについても必ずこの兩方面の自我といふものが矢張り活らいて居るといふことを忘れてはならぬのであります。

意志の自由と制限

そこで私共はこれからの自分の運命を拓くについても、この自分にとつて非常に利益なる經驗即ち成功力の遺傳と、又その反對の不利なる經驗即ち失敗に落つる習慣との二つの方面を備へて居ります。言ひ換ふれば成功の可能性もあれば失敗の傾向も備へて居るわけであります。斯くの如く、人間には目的を遂げる所の意志の自由もあれば、又これを制限する所の力もある。俗にいふ、思ふことはなかなか思ふまゝにはならぬといふ

ことも此所から出て居るのでありまして、私共が自我發展の目的を立て理想實現の計畫を立て、それが果して成就するか、或は遂に失敗に終るかといふことの決まるのもこの二つの力の流れの外に出ることは出来ないであります。つまり人間には意志の自由があり、又可能性を持つて居るといふ自由があるに違ひないけれども、その自由を得るには一つの法則があつて、人間選擇の領分に屬するまでには一つの活動法則といふものがある、と假定しなければならぬのであります。

ところで、私共人間は日頃意志の力、或は信仰の力、或は自念の力、といふ事を信じて居る。昔の人の言葉にも「信仰はよく山をも移す」といふことをいうて居るやうであります、が、決してこれは眞理でありませうか。

私共は毎日意志で支配し信念で生活して居ります。けれどもなかなか思ふやうには行かない、理想は容易に實現されないのであります。それは何故でありませうか。この思ふやうにならぬこと、自分の意志に制限を加ふる力、これを運命といひます。前にも申しましたやうに、この力は自己の内にもあり、又社會的境遇にも潜在して居ります。この運命が私共の意志を制限し、又信仰を制限して居るのであります。それ故或人はこれを以て宿命説を信じ運命論を稱へるのであります。例へば人間

の身體のことから考へて見ても、皮膚の色とか、身長といふやうなことも、或程度迄は改善することが出来るが、絶対に變へる事は出来ない。それは如何なる信仰も如何なる自念力も及ばない所であります。即ちこれは人種又は個人々々の遺傳の力といふものが制限して居るのでありますから、神の力の如き絶對の自由を有しない人間に於ては如何ともすることの出来ないこととであります。このやうに、私共の自由を制限するものを擧げて見ると他にもまだいろいろの場合が起るのであります。即ち一、遺傳から受けた能力の制限、二、境遇の制限、三、人間との關係の制限、四、將來に就いての制限

「これは將來といふものが開けなければ人間の成功といふことではないわけであつて、よし一時成功したかのやうであつても、それは一時的偶發的のものとなり終つてしまはなければならぬ。即ち今は健康であつても、今は可能力があつても、今は生きて居ても、若し將來といふものがなければそれは皆續けられないものとなる、即ち矢張り制限を加へられたと同じである。といふのであります。」

このやうに人間の意志の自由といふことに對しては幾多の制限があるのであります。併し私共はこゝでよく考へなければな

らないのであります。即ちこの制限を加へる力は絶対的でないといふことであります。人間の意志の自由が絶対でないやうに制限の力とても絶対ではないのであります。即ち宿命、運命といふことは絶対運命、絶対宿命ではないのであります。即ち相對的であるのであります。自由と制限と相對して、その何れかゞ勝利を得て行く所に漸次成功が積み上げらるゝのであります。

私共人間の意志の自由といふことは神の力の如く絶対的ではないが、今後發展することは出來ます。幾多の制限はあるけれども、併しその制限をだん／＼には解いて行くことの出来る自由を有して居るのであります。これが即ち人間界の進化といふものであつて、實に人生の意義はこゝに在るのであります。人間には神の奇蹟に見るやうな絶対的自由はない、けれどもそれと同じ本質は與へられて居るのであります。たゞこれを相對的に活用するといふ點に於て神と人と異つて居るのであります。この力は即ち神の力と共通のものであつて所謂「萬物に神性あり」とか「萬物は皆佛性を享けて居る」といふところのその本質は皆この同じものを指して言つて居るのであります。

此の力が人間に於ては即ち意志の力となつて自動するのであります。この力を徹底的に、自分の境遇と自分の思想——考

——とによつて、出来る限りの極力を盡して用ひたならば、其所に制限を破つて突き進まれないといふことは無い、其所に自己發展の出来ないといふことは無い、其所に成功出来ないといふことは無い。これが人間の意志の自由であり、自動の精神であり、信念の眞髓であります。即ち宇宙の大潮流に自ら飛び込んで自分で泳ぐこと、自分で考へ、自分で築いて行く、自分で制限を解くのであります。さうして創造し改善して行くのであります。

私共には斯様に強い力がある。然るにその力を制限されては或は病氣に罹つたり、或は満足出来なかつたりするといふことは皆過去の人類の遺傳があるからであります。之が一朝一夕に除かれなからであります。けれども本質は決して絶対に此の運命に定められるものではないのであります。人間の意志はこの運命に對する相對的自由であるとは申しませけれども、併し結局、私共を定めるものは、矢張り意志であります。意志が私共の現在を創造し、私共の將來に改善の自由を與へて行くのであります。私共はこの意志の力を以て自由を獲得して進むことが出来るのであります。即ち信念によつて如何なる事をも成就することが出来るのであります。

併し其所には矢張り制限があります。この制限に對して、所

謂宗教の形骸のみを見てたゞ、祈りをすれば城が落ちるとか、何か唱へごとをすれば救はれる、制限は自然に除かれて自分の目的は遂げられて行くかの如く考へて居ることは迷信であります。即ち制限に對する自由、——言ひ換ふれば運命に對する人間の力——といふものは、どうしても私共人間に與へられてある所の意志の力を以て、自ら向つて行かなければならないのであります。即ちそれは自動力であります。人間はたゞこの力を以て、與へられて居る本質の意志、神と共通の自由意志の活動發展の道を講じなければなりません。

さて運命の力に次いで私共の意志に制限を加ふるものは前にも述べたやうに境遇といふものゝ強い力であります。けれどもこれとても絶對的のものでは勿論無いのであります。矢張り意志の力を以て少しづつでも——假令少しづつでも——改善して行くことが出来るといふのは人間に與へられてある自由の尊さであります。

要するに人間は、自分が自分の主人となり、自分が自分の支配者となり、自分が自分の權能者とならなければならぬといふことになります。でなければどうしてもこの人生に生れて來た甲斐がないことになるのであります。眞の人生の味を味ふといふことが出来ないわけになるのであります。繰返していへば、

人間の目的は自我の發展といふことであります。その目的を達する第一原因となるものは意志の力である。意志の力といふのは自動の精神である。今念じて居ること、今覺悟して居ることが眞に人格發展の結果を生む時、其所に相對の運命、境遇、遺傳といふ制限は解かれて人間に自由の人生味が味はるゝことになるのであります。

〔家庭週報〕第四百二十二號、四百二十三號 大正六年六月

八十年國に盡しゝ動機

大隈侯賀會に於て

大隈侯爵は本年八十歳の高齡に達せられましたにつきまして、畏くも、天皇陛下より天盃を賜はり、長壽を祝へ、といふ有り難い恩命に接せられました。早稻田に於きましてもその内祝——即ち子弟、御家族及び親類關係のお方をお招きになりまして——お祝ひがありました。侯爵にはこの學校にも深い御關係を願ひまして、否寧ろこの學校の出来ない前からの、申さばこの學校のお祖父様にも當る方でありまして、かゝる關係深いお方が斯く御高齡に達せられ、尙矍鑠として國家の爲にお盡し下さることは實にお日出度いことであります。それで我々もど

うかほんの内祝ひながら、この喜びの意を表したいといふことを申し出ました處、侯も喜んでおうけ下さつてこの暑い日にも係らず、御夫人も御同伴にてわざ／＼御出で下さつた事は實に感謝致す處であります。處で何かお喜びの意を表したいと生徒もいろ／＼考へましたが、鳥渡此の時局に遭遇して居ることであるから、寧ろ誠意を表し、侯爵が國家に御盡し下さる深い御意志のある所を承つて、その御厚意の幾分でも我々の實行の上に表示して報ずることが最も適當のことであらうかと考へまして、それで今日は侯爵が今日迄の御生涯に於て、新日本建設の五十年間の御苦心談及び舊日本にお育ちになつた三十年間の御經驗をうかゞつたならば、即ち維新の活歴史とも見るべき侯の八十年の御經驗を伺つたならば、この上もない事と思ひましてお願ひしたのであります。然して私は侯爵の御主義についてその那邊にあるかを、即ち八十年一日の如く國家にお盡しになりましたその動機、御精神が何處に存して居るかを伺つたならば又我々にとつて最も興味深いことと思ふのであります。

實は昨朝——毎月曜日の朝の瞑想會に學生自ら格言のそれに添ふやうな英語のセンチメントを選んで貰ひたいといふことを私の處に申出ました。そのエマーソンの語は

「何人と戦ひ何人が斃るゝとも正義は永久に勝利者である。正

義を味方に戦ふ者は假令十度百度屠らるゝとも神これに勝利の榮冠を與へ給ふ」といふのである。私はそこで、この語の前に左の一言を添へました。

「大勢に従ふ者は起り大勢に逆ふ者は亡ぶ」

これは大隈侯が嘗て出版せられた開國五十年史の序文の冒頭に掲げられましたところのものでありまして、侯爵の御主義を簡明に表示されたものであります。

侯爵が八十の齡を重ねられて今日尙壯者にも劣らぬ元氣を以て、否益々熾んなる意氣を持して立たるゝ事その動機動力ともなつて居る處のものは、實にこの主義精神に存して居る事かと私は了解して居るのであります。此の御主義の眞意は天に順ふ者は興り、天に逆ふ者は亡ぶといふ事であらうと思ひます。

茲に、米國のコロンビア大學のバトラ博士から送られた小冊子があります。バトラ博士は米國大學に於ても錚々たる人であります。この冊子に掲げられた論文の如きも實に世界の輿論を起すべき大論文であります。實に米國に於ては大統領ウイルソンにしても、又はエリオット博士及びバトラ博士にしても、大論文を草して世界の大勢に貢獻する處の人であります。その意氣又實に熾んなるものであります。處がこれに匹

敵する人を我が國の何人に求めませうや。私はこの時直ちに大隈侯爵を思ひ起したのであります。

バトラ博士はその論文中に言つて居る。「今日米國及び世界の大問題は世界の輿論を喚起する事である。之迄世界の輿論は二つに稱へられて居た。其の一は權力意志——ニーチエの所謂——に依つて世界を統一せんとするもの、他の一は善意志——正義、秩序、公律道德——が世界の歸一點であるとするもの、とである。前者は國際道德などといふものは反古同然に考へるものであつて、いふ迄もなく今日はその誤れるものであることを悟つて來た。茲に米國は正義の劍を携けて立つた」と。

米國はもと十三州から成立つた國でありますが、今日は四十八の合州國であります。つまりその國と國との間に一つの聯合が保たなければならない。この間の問題を解決するにはこの公律道德がなければならぬ。この經驗を持つた米國は殊に世界に對するこの主張を稱へる必要があるのであります。そこで今日の輿論は「今後世界に國際公法を説き一種の高等の大審院を要する」といふやうな計畫をも稱へ、今日既にそれに着手して居るのであります。

バトラ博士は又言つて居る。

「事實に於て一九一四年の英國は、今日既に存立して居ない、

一九一七年の新しい大英國が今日存立して居るのである。一九一四年の佛國は既に去り、一九一七年の新佛國は成立した。一九一四年の米國は既に無い、斯くの如き米國は再び永久に無く、今將さに新亞米利加は生れ出でんとしつゝある」と。

これが今日の世界の大勢であります。バトラ氏等が今日頻りに提唱する所のものと、侯爵の主張せらるるものと相一致する所があります。その骨髓は新日本建設の五十年間に於ける侯の勳功に於て明らかなるものであります。

希くば侯が不死の元氣を以て帝國の前途に、尙人類の將來の爲に東洋を代表してお盡し下さることを、我々は滿腔の誠意を以て祈り、又侯の八十年の御經驗に照らして我々及び將來の國民に指針を與へられんことを心から願ふものであります。

（「家庭週報」第四百二十四號）大正六年七月

信念涵養の意義

信念涵養と云へば、信念の種子が有つて是れを養ふといふ意味になるのであるから、兒童の心に此の種子が蒔かれてあるか否かが先決問題である。多くの人の信ずる所では是れには皆疑問を挿む餘地がないやうである。この種子は即ち人間の可能

力である。此の可能力は如何なる本質のもので又如何なる刺激で動き、如何にして現れ行くものであるかと云ふに、是れは原人時代に遡つて人類學上から又社會學上から研究すべき問題であるが、兒童の時代からこの可能力が有り自動の力がある事は學問上充分證明されて居る事實である。又此の内から出る可能力はどう云ふものであるかと云ふ事は實驗心理學からも形而上學からも考究すべき根本問題である。

信念の種子即ち可能力とは何ぞ——といふ問題になつて來るが、これは實驗によらなければ知る事の出来ない問題で説明だけではわからない。私自身の經驗から考えて見ると、私は六歳の時に母を亡うたのでありますが、其の時、今日から考へて見れば、所謂信念の萌芽と名づくべきものが自分の内部から活き出した事を確信するものである。即ち誰にも教へられないのに、人間の生命といふこと、未來の世界のことなどをいろいろと考へた。これは一時の感情的のものではなく、其の後のいろいろと此の思想を打ち消さうとするものはあつたが、決して打ち消されない或力が此の思想を今日迄も導いて來て居る。此の内からの力といふこと、こゝに人間の力の根柢はあるので、これは非常に強いものである。何者といへどもこの力の勢を眞に押へ得るものはない。況して人工に依つて作り上ることは勿論出

來ないことである。私は母に別れた時、夕方になると常に母を慕つた。而もその母はもう永久に見ることが出來ない人であると思ふと、私の心は憂ひ、子供ながらも宗教上の考、生命の問題が淋しい私の心を誘ひ醒して來る。自分の慕ひ憧憬する對象であつた母を亡うたので、そこに抑へられぬものが動いて來たのである。斯くの如く信念の種子は慥かに蒔かれてあることを自分の經驗上からも、亦他人の經驗に照らしても信ずる事が出来る。がしかしこれには刺激が必要である。即ち其の境遇が必要となつて來る。言ひ換ふればその材料を供給し、光や熱を與へることである。兒童に夫等の境遇を與へるものは親と教師と周囲の友人とであるが、其の親や教師の信念の根柢は何處にあるかといへば、それは宇宙にあるのである。聖書にあるやうに、『涵養するもの、水そぐものは教師であるが、眞に是れを育つるものは神である』即ち其の刺激の根本の力は絕對者である。大生命である人生は所謂宿命フラスチニといふものの制裁はあるが、併しながら其の外に人間には意志の自由といふものを持つて居る。この意志は宇宙の意志と合致して行くものであつて、そこに宿命フラスチニを制禦して行くところの意志の世界が出來るのである。この意志の世界に於て相互に反應刺激が起つて、其所に人間に與へられた信念の萌芽が養はれて來るのである。即ち宇宙

の意志と人間の意志と働き合ふのである。親子兄弟の關係、大いなる社會的關係皆これから出来るのである。それ故兒童にとつてその親や教師の人格の感化はその信念の種子を養ふのに、どれほど大なる力があるかわからないほどのものである。云ひ換ふれば信念の萌芽の涵養に必要な刺戟は、一は社會的空氣即ち社會的關係から出来る所の父母及び教師を通じて感ずる感化と、他の一は眼に見えぬものからの感化で、それは神そのもの絶對そのものから直接にうける感化である。この兩方面からの刺戟によつて、子供の信念が出来るのである。

この信念の萌芽を私は自念の力と云ふのである。兒童が物を觀察する所を見ると、自然が現はす生命を憧憬して居るやうである。例へば私共が兒童の頃日輪を拜み天の川を見て一種の感化が起つたやうに、斯ういふ現象は兒童に無限を暗示し宇宙の偉大を想像せしめるものである、日頃兒童はよくものを根掘り葉掘りして尋ねるものであるが、それは根本まで行かんとする自然の力がせしめるのであつて、現象だけで満足しない大原因まで行かんとする傾向である。つまり何か憧憬する慕はしい情が根と成つて、天地の大生命に達しようとする祈りである。又いろく疑問を起すと云ふのは、自分のうちに同類者を見出さんとするもので、そこに信念の萌芽のある證である。要するに

この想像、自念、考へるといふことが人間に大切な能力である。これが活動に現はれたものが即ち人間の生活である。兒童が物を毀して見るといふのも、即ちこの可能性が活動に表はれたもので、毀して又是れを造らうとすることや、物を並べて見ることや、拵へると云ふ事組み立てる事がその根本の目的なのである。誰でも造る前には想像といふことをする。是れが人間の創造クリエーションである。宇宙の創造力クリエイティブパワーである。兒童が何故創造を好むかと云ふと、宇宙の創造を模倣するのである。天地が創造の性を具へて居る通り、兒童にも同じ性質が與へられて居る。子供も神と同じく創造者である、深く冥想し想像すること、又遊戲やお伽噺を喜ぶといふことは皆信念であり祈りであるのである。是れを展ばすやうにすれば、そこに兒童の人格が現はれ、天才が育てられるのである。されば兒童の信念或はその天才を展ばさうと心掛け育てる場合には先づその傾向に注意せねばならぬ。其の時に現はるゝ傾向を見、これに注意して其の發育を妨げぬやうにせねばならぬのである。然るに往々社會的に是れを妨げて居る。誰が妨げて居るか云ふと、やはり親や教師である。

そこで兒童の内には必ず信念の萌芽があるが、此の萌芽を如何に涵養すべきかは社會に取り教育者に取り重大なる問題であ

る、先程からはこれを涵養するために既成宗教に依るべきかと云ふ意見も有つたが、私は敢て既成宗教を排斥するのではないが、既成宗教に依ると否とに拘らず、是れが涵養に最も必要なことは、人格に依つて表はるゝ氣分、即ち空氣といふことである。これは兒童にとつては父母及び教育者の人格の感化が一番根本になるもので、其の次は周囲の關係である。眞に父母及び教育者又其の周囲に敬虔の氣分、徹底した空氣が満ちて居れば、それが非常に強い暗示を與へる。故に其の精神さへ根本のものに適つて居るならば、其の形式は何に依つてもよい。詩、音樂、劇、總てのものに現はれる精神の根本は即ち此の空氣にあるのである。處が今日の既成宗教は多く此の根本が忘れられて居る。精神の根本、生命の泉が涸れて居る宗教の形式に依つてどうして兒童の心を養ふことが出来やう。信念の涵養が出来やうぞ。

此の教育を始める兒童の年齢は随分早くより始めなければならぬ。昔ギリキの有名な聖人に或人が其の子の教育を頼み、「先生願くば先生の思ふ存分に此子を御教育下さい」と云ふと、聖人がその子は何歳であるか、と問うた。三歳、と答へたら、それはもう遅い、と云うたと云ふことであるが、かう云ふ實例は澤山にある。かのヘレンケラーは目も見えず耳も聞えない

が、只震バイブレーション動を感じて音樂を味ふことが出来た。或時「ブラック、クロー」と云ふことをいうたので人々が不思議に思ひ、其の母に尋ねて見たら、「ヘレンケラーは一歳六ヶ月の時病氣のため視覺を失うたのであるが、其の以前に彼の父からよくブラック、クローと云ふ歌を聴いたのでその歌が彼女の潜在意識中に疊みこまれて居たのであらう。」と云ふ事であつた。それ故に子供が物を云ひ出してから教育を始めては既に遅れて居る。物も云へない頃から見たもの聞いたものが其潜在意識になつて居る位であるから、眞に教育しようといふならば出来るだけ早くから教育しなければならぬ。畢竟するに親又は教育者が眞に信念に生きその生活に信仰があれば兒童は直觀力、模倣性に富んで居るからそれによつて、父母及び教育者四圍の境遇の凡てが兒童の信念の刺戟となつて其所に發生し培はれて行くのである。

あゝ奥田市長

〔家庭週報〕第四百二十七號）大正六年八月

顧みれば大正四年六月であつた。奥田氏が東京市長の職に推されて以來、氏はもとよりその性格の致す處とはいへ、熱誠一

貫その職に殉じて今日に及んだのである。

今更言ふまでもないことであるが今日のやうに政界の事情が複雑になつて居る時に當つては、その帝都の代表機關を處理する東京市長の任は實に重く、又如何に繁雜であるかは寧ろ想像以上と察せられる。然るに氏はよくその熱誠と、その力量と、その自信とを以てこれに當り、多年宿積の大小の市務を處理刷新して所謂首都の土臺を作つた。さうして今後は積極方面の活動に進まうとする時に當つて、突如氏の訃音に會ふことは何たる悲痛事であらう。

従來日本では國事國難に殉ずるといふことは戦争に出なければ出来ぬやうな觀念があつたが、今世界未曾有の戦争中も午睡者多い中に、奥田市長の如き人格が苦戰奮闘、眞に國事困難に倒られたといふことは實に痛嘆に堪へざる事なりと雖も、氏の戦死は深き刺戟、印象を市民及び國民に與へたのである。全く氏は必要に應じてよくその犠牲を覺悟して居つたやうである。故に市民を導くにも單に言葉や形式でなく、實行を以て、生命を以て指導した。されば市民も亦その至誠の人格に感激し、その徳望、力量に信頼して實に名市長と仰いで居つた。氏も又過去の隱忍努力に耐へて今後に必ず多大の計畫抱負もあつたであらうに、今やその人を失つたことを市民としての哀惜亦

多く、これに超えたものを見ない。東京市がこの名譽ある市長の爲に先例なき市葬を營み、氏を哀悼するもの各階級各業務の人を擧げて悲哀痛悼の情を一にしたことは、偏へに氏の人格と功勳に因るものといふべきである。

氏は又官職公務の外に在りては一個私立大學の學長として育英薫陶の事に親しみ、敢へて清貧に甘んぜし人である。余は殊にこの方面に於て氏の高潔なる人格に屢々接した。本日(二十六日)も日比谷公園に於て營まれた葬儀に加はつて感じたことは、葬列が番町の氏の邸を出て葬場に行く途中、二百萬の東京市民が擧つて嚴肅なる哀惜の情を表して居たことは勿論至當のことであるが、殊に氏が生前意を注いだ中央大學前に葬列の來かゝつた時は何人も肅然として衿を正した。同大學は先頃全燒の厄に遭ひ、燒跡は未だその儘に當時の哀愁を語つて居るが、此處に同校の教職員及び關係者等は集つて靜かに燒香しつゝ靜肅に故人の靈柩を迎へ、やがて葬列に加はつて來たことである。この嚴肅なる師弟關係の態度を見ても、氏が生前に於て一方には歴代の市政に於ける難問題を提げながらも、尙この育英のことに如何に意を用ひ、心を勞して猷身の誠を盡して居られたかを想ふに餘りあるものである。葬列の進むに從つて焚く香の煙りのたゞよひ來るのは恰も氏の人格の香りが人の心を刺戟

し指導するかの感があつた。

尙又余は殊に氏に對して感謝し、尊敬することは、氏がわが國の女子高等教育に對せらるゝ態度である。近くはわが女子大學の評議員としての重任を快諾され、その披露會に於て發表されたる意志は本誌讀者の記憶にも未だ新たなることであらうと思ふ。その以前に於て氏は永くわが女子大學の法制の講座を擔當され、その高朗なる人格の印象は多數學生の頭腦に深く刻まれて居ることである。抑も女子大學が創立さるゝ時に當つて當時我が國に於ける女子の高等教育に對する輿論は尙混沌たるものであつた。然るに氏は當時文部次官として重要な地位にあり、そのこれに對する態度は人々の注目の中心であつた。然る時、氏は斷乎として女子高等教育に賛成の旗色を鮮明にし、尙且自らその講座を擔當して一意斯道の爲に力を盡されたのであつた。後氏の健康勝れず且公務に多忙を極めらるゝやうになつて、氏も止むを得ず擔當の講座を辭去されたのであるが、その好意は常に一貫して居つた。先頃に至つて氏を評議員に推薦されたのは久保田男爵であるが、併し畢竟氏の意志の存する處がなかつたら、快諾されやう筈はないわけである。彼の繁多なる職任に當り、又直接薰陶の意を用ひらるゝ、大學の責任をも提げ、尙且女子の高等教育の爲にこの請ひを容れられたことは實

に感謝の外はないのである。その披露式の當日大隈侯爵、澁澤男爵も評議員として臨席され、種々後事に就いて託し、且期待されたのであつたが、その日奥田氏は同じく新評議員として立たれた久原氏と共に恰も誓言して萬事の責任を快諾し、且言はれるには、「今日大隈老侯爵、澁澤男爵に比しては年齢に於ては確かに二十歳位は違つて居りますから、その意味に於て私は先輩評議員諸公のお言葉の如く少壯であるのに違ひありません。加ふるに有爲を以てするといふ資格は私にはどうしてもないのであります、殊に近來頻りに健康を害ね、従つて氣力も衰へて居りますから、事に依つたら或は少壯の私の方が先輩の方々よりもお先きにおまゐりするかも知れないといふことを考へなければならぬ次第であります。……(中略)併し、一旦お引受けした以上は、私に出来るだけのことは致すつもりで居りますし、又校長の御指導のもとに一生懸命この微力を捧げたいと考へて居りますが、併し學生諸子も亦協同一致して發展改善に努めて戴かなければ當校の完全なる目的を達することは出来ないであります……云々」と。——今よりおもへば、この時の氏の豫想が悲しくも當つて、その一場の演説はやがて我が國に於ける最後の遺訓となつたわけである。氏は平常の持論の如く、苟も事を請合はれない。けれども一旦承諾されたことは如

何なる困難があらうとも責任を逃れ、曖昧に附するが如きことは決してない。この時に於て氏の腦裏に困難といふ事は忘れられて居る。爲し遂げる迄はどこまでもその意志を貫徹するといふその意氣が氏の全人格に漲つて居るのである。今や何れの方面に於ても氏の如き人格を要望すること痛切なる時に當つて、あゝその人は既に亡いのである。

併しながらその意志、その教訓は氏の人格に接したる東京市民に依つて將た親しくその薰陶を受けたる學生青年に依つて遂行されるであらう。さすれば氏は死したのではない。必ずやその英靈は永久に生きて行くことを余は確信して、今その風格を追懷して居る。(談)

〔「家庭週報」第四百三十一號〕大正六年八月

黎明の祈り

今朝、天長の佳節に當りまして、過ぎし三ヶ月間始ど陰鬱であつた空が晴れてこの清朗なる太陽の光りを見ることは實に喜ばしい氣分に充たされるのであります。

この清朗なる天氣にあらはれて居る天地の氣分は如何なることを我々に暗示して居るものでありませうか。私は今朝起きま

して、日の出に向つて瞑想し、次ぎに西に向つて何等かの暗示を求めたのであります。私の眼に映じましたのは、即ちこの黎明に將さに西に入らんとして居る恍々たる満月でありました。又その月に反射して輝かな光りの波をうたせて將さに雲上に昇らんとするその太陽の光りでありました。私は茲に一つの暗示を與へられたやうに感じたのであります。

月は夜を現すものであります。太陽は晝を示して居るものゝ象徴であります。その太陽とその月とが、同時に我々の眼に映ずるといふことは、毎年幾度かあることでありませうが、自分には生まれてから今朝が始めてのやうに物珍しく感じたのであります。これは私の心に、晝と夜とが同時に到來したといふ感じが起つたのであります。今日の天長節に深く藏せられて居る空氣は、この象徴が現し、暗示する所の意味に過ぎないといふ感じを持つたのであります。

我が帝國には、尙夜の空氣、夜の氣分が残つて居ります。まだその眠りが醒めない部分があるのであります。併し醒めないうちに最早東天から太陽が將さに昇らんとして居るのであります。私は天地に現れるこの氣分の象徴を見まして、又この天長の佳節に、内外に起る出來事を觀察して、何物かを暗示され、何事かを教へられて居るといふ情を禁ずることが出來ないので

あります。

この時局——即ち、海を距てたかなたに於きましては、二千萬餘の生靈は生命を賭して、ある目的の爲に奮闘して居るのであります。至尊なるわが陛下に於かせられては世界が今、斯くの如き渦亂にあることについて軫念を煩はせ給ふことであり、又我が國運の前途について叡慮をめぐらせ給ひ、深く天祐の御導きを祈らせ給ふこと、恐察し奉るのであります。我々臣民は陛下の高き御心を體しまして、この畏き御軫念に對し共鳴し奉らなければならぬと恐懼感銘するものであります。

實に、萬世一系の美しい歴史に生きて居りますこの帝國、今後の運命を拓かんと努力して居ります、この帝國を圍繞する所のわが同胞、眼に見えぬ生靈は何事を暗示し、何事を祈り、何事を促して居るのでありませうか。天より響く無聲の言葉は何をわがこの國民の耳に囁いて居るのでありませうか。今、世界の時局に際して最後の覺悟を定めんとするこの國民の良心に訴へて居る無聲の言葉は何でありませうか。西より東より南より北より響いて居りますその言葉は、そも如何なることを力説して居るのであるかを我々は心を落ちつけて聞かなければなりません。さうして又世界を圍繞し看視して居ります所のその注意點は如何なることでありませうか。この佳節に於

て我々は深く考へなければならぬことであると思ひます。

x

今より五十年前、即ちわが明治維新の際に、わが國の多くの志士は國事に生命を捧げて遂に難に殉じて斃れたものが澤山にありました。これ等の志士は私共が幼年の頃に多く血氣壯んな青年であつて、殊に私の生國山口縣の人々の中には、私などが知つて居る人の名前を見ることも尠くないのであります。私はこの人々の實歴談などを聞く度に、實に強い刺戟を與へられるのであります。

先頃、これ等の人々の五十年祭が營まれ、尙これを記念して發行された「維新戦後實歴談」といふ書物を私は一讀いたしました。それは當時の長州戦争から始めて國に殉じた志士の年齢又はその戦死の場所などまで委しく記したものであります。これに依つて見るとこの時の戦死者中の大方は、十九歳乃至二十歳といふ將來有爲の青年であつて、中には尙十六歳、十七歳といふ若年の人もある——昔の十六歳といへば満十五歳でありますから丁度今の中学校高等女學校の二、三年の生徒に相當する年齢であります——これ等の人々は勿論當時の事故、徵兵令で出陣したのでもなく、又必ずしも士の家の子ばかりでも

ない。百姓は従卒となり、少しく學問でもしたものは各々その使命を自覺して深い天籟の聲を聞いて自ら起ち、自ら士氣を鼓舞したのであります。即ち彼等は神明に誓うて出陣し、一身を國の爲に捧げたのであります。

この國の爲に盡すといふこと——たとひ微弱ながらも覺悟を以て起つ——といふことほど人生に輝いた美の感を我々に與へるものはないのであります。

その明治維新から今は五十年経過しました。私はこれを第二維新というて居ります。即ち世界的維新の起るべき時でありませんが、併し今我が國の青年男女は何を考へ、何を感じ、又如何なる覺悟を持つて居るのでありませうか。

明治維新當時の文化は未だ今日の如く進んでは居なかつたのであります。それ故たとへば戦をするといつても、今日の如く輕快な武器もなければ文明の利器も備はらない、極めて不自由な中に立ち働いたものであります。而も魂一つは如何なる外敵にも怖れず屈せざるものを持つて居りました。當時士氣を鼓舞して進軍した有様を叙した中に、騎兵隊は裸體に劍を帶して突進した。とあるのを見ても如何にその壯烈なものであつたかを想像するに餘りあるものであります。

これに反して、物質文明は進んでも魂を失うた國民の態度は

ど醜なものはない。最近の報道によると、今次の歐洲戰爭に於て伊太利の六萬の兵は戦はずして降服したとある。これほど醜いものはないのであります。實に伊太利の此の兵士等は生命を惜しんで伊太利の歴史を穢したものであります。又過日は露西亞の某師團も戦はずして降参したといふことであります。これ等は自己の生命を惜しんで露西亞の耻を世界に曝したものであつて、實に人生にこれほど醜惡なものはないのであります。

これは國といふ大きな一つの團體のことでありますが、個人としての態度もその醜美を決する所は一つであります。他人の危害を見てこれを傍觀して居るほど醜なものはないのであります。若し良心があるならば、たとひその危害を救ふ爲に自分も危いといふことを知つても、どうしてこれを傍觀して居ることが出来ませうか。兇暴なる者に弱者が虐げられて助けを呼ぶとき、聞かざる眞似をしてその暴力を恣にさせて置くといふことは良心があるものならば許して置かれぬ筈であります。自分の生命が惜しくて他人の爲には戦はれないといふ臆病者、これほど人間の醜いものはないのであります。

我が國の武士道は「義を見てせざるは勇なきなり」といつて訓へて居ります。只生命が惜しい只利益、自分といふことを考へて人の危害を傍觀して居るといふことはわが武士道では

ないのであります。

今回の歐洲戰爭に於て米國に於ける大學生は世界救済の爲に、ハーバードの大學生が先づ先頭となつて出征したのであります。その次に出征したのはコロンビヤ大學生であります。その時即ち一九一七年五月六日、同大學の總長、バトラー氏は熱辯を以て出征學生に訣別の大演説を試みて、曰く

「この大學の長い歴史にはいろ／＼光榮ある事實はあるが今度の如き——學生が義の爲に捧げて出陣するといふ——光榮は嘗てないことである。今この大學の最も勇氣ある最も優れたるこの學生を將さに戰場に送らんとしてゐる我々のこの送別會は、全能の神、無限絶對の天地の大靈に我等の身命を捧げ、その使命に奉仕して行くといふことで、即ちこの送別會はその神の前に我等が誓ふところの最も壯嚴なる祈りである。

この大學はその無限絶對の上に立つて居る、又その名に於てその信仰を持つて、代々の學生我々は其所に奉仕し、其の目的の爲に奮闘努力をして居るのである。故に今、この青年學生が神の正義の戦ひに参加するといふこと、及びその戦時状態となるといふことは我々の人生に於ける最も意義あること、最も神聖なること、最も幸福なることである。即ち今

我々がこの覺悟を持つて居るといふことは人生の最高價値に向つて顔と顔を向け合つて居るのである。そこでこの送別會はつまりこの意義——何の爲に我々は進むのであるか、その究極目的は何であるか——を冥想し祈念するのである。

我々が今この祈りをして居る間も、海を隔てた彼の地では二千有餘萬の軍勢が、此の國家、この大學が生きるか將た死ぬるかその運命の爲に、苦闘奮戦して居るのである。云々……」

と述べて居る。今この演説の光景を想像して見ると、如何にも美しい感じが今この世に表れて居るといふことを感ぜざるを得ないのであります。

彼等大學生は出征に臨んで何を祈つて居るか、又二千萬の出兵の半數たる聯合軍の壯者等は何を祈りつゝ、戦闘を續けて居るか、これ等を見るに、この人々は皆喜んで祖國の爲に將た天地公道の爲に自己の心命を捧げたい、といふこと、たゞこの赤誠を以て彼等は最後の決戦を覺悟して居るのであります。

この義に與した亞米利加合衆國の祈りと、敵國獨逸皇帝の祈りとを比較する爲に最近のその消息を左に掲げませう。

「神は獨逸國に勝利を與へ給ふであらう。その爲に今は非常に六つかしい試験を與へて居る。さうして獨逸國民はその試

驗を通過しつゝある。——英國は高慢にも頑強に抵抗して必ず勝つと云つて居る、さうして我々を亡ぼさうとして居る。けれども神は我々に勝利を與へるであらう。この戦ひの報酬は活ける自由、海の自由、自國の自由獲得である」

といふ祈りをして居るのである。暴戻なる獨逸といへども、たゞ神には懼れて居る。如何に権力萬能といへども、その権力以上の實體即ち神には敵する事は出来ない、その爲に最後の運命をまかせるといふことは餘儀ないことであります。これは聯合國とても同じことで神は天地の神であります。その何れが是非か、終局の裁判は人間の力ではない。唯神命である。天地の公道であるのであります。但し、この神の意志とは、善意志か、惡意志か、道德意志か、權力意志か、獨逸皇帝の祈りはその何れに向つて捧げられて居りませうか。——彼は權力意志を主張し、これを助くるものを神として居るのであります。

x

獨逸皇帝の祈りは、獨逸が勝つやうに、獨逸國が發展するやうに、即ち自國の爲、自己の爲の祈りであつて、世界をどうしよう、世界の諸國をどうしようといふやうな祈りは少しもないのであります。然るに、曩にその學生を戰場に送つた總長バト

ラーは、どういふことを祈つて居りませう。彼も亦神に祈りを捧げました。「神よ、あなたは自由と正義を愛する心を我々に植ゑ付け給ふたのである。今我々は、あなたの御前に於て、あなたの導きを祈るのである。どうか我々は、あなたの光りに依つて——この普遍的正義の光りに依つて——この眼を開き、眞を見得るやうに……云々」と先づ自分を省み祈つて居るのであります。又彼はすべての世界の人類が眞の心から兄弟となり友達となるやうに、どうかあなたの統御の依つて調和せられるやうにといふ事を祈つてをります。

獨逸の主義は、權力が彼の道德であり、權力が彼の祈りであります。けれどもこの祈り——聯合國を代表する總長バトラーの祈り——は、正義が權力、道德をつくるといふ信仰であります。この信仰を以て、どうか我々の義務を終りまで全うすることの出来るやうに、神よ、勇氣を我に與へ給へといふ祈りであります。之は自分をどうして下さいといふのではない、世界の爲、人道の爲の祈りであります。善が悪に勝つことを自念する祈りであります。

この祈りを比べて見ると、この世界に二つの意志が戦つて居るといふことがわかるのであります。この何れが正義であるか、といふことは我々の世界的普遍的正義の心に依つて、その

正邪を判断しなければなりません。さうしてその何れかに去就の態度を決めなければなりません。さうして私は今の我が國情を省みました。今のわが青年を省みました。この時、私は憚らずいへば、わが青年男子の態度はどうであらう、たとひ一人にても義の爲に、正義の爲に、その一身を擲け出して一臂の力を添へようといふ者があつたならば、どんなに日本は幸であらうか、と思はざるを得ないのであります。生ける青年はなきか！私はその人の生れんことを祈らざるを得ないのであります。

明治維新には十六歳の青年が生命を捧げて戦つた、今日の青年の態度はどうであります。併し女性は男子よりも精神的であるといふその力に感ずる所の特性をさづけられて居るのであります。然らば「女性よ」「日本の女性よ」諸子は、今この青年男子の状態を見て、見苦しい、とは思はざるか、「私が若し男子であつたら」といふ義侠心がなぜ起らぬのであらうか。

今より四百年前の佛蘭西に於ては國は敵國に蹂躪され、男子といふ男子は戦ひに疲弊し、青年貴族は權勢の爭奪に日も足りない。兄弟は垣に聞き、壯者は生命を惜しんで、一人として勇氣を鼓舞するものはなかつた。この時百姓の家に生れた當年十六歳の少女があつた。彼の名はジャンヌ・ダルクである。ジャンヌ・ダルクは幼少の頃から村の爲に善を盡した善良なる少女

であつた。彼の女は纖弱い少女ながらも、唯一つ眼に見えぬものゝ力強いことを信じて居つたのであります。

彼女の眼に映る當時の佛蘭西は、如何にも見苦しく醜なものであつた。彼女はこれを傍觀して居ることが出来なかつたのであります。遂に身分は纖弱い少女たることをも忘れたるかの如く、彼女は奮然として起つた。さうして佛蘭西のために、祖國の眠れる貴族、男子のために、彼女は信ずるものに向つて熱淚を以て訴へ熱誠を以て祈つたのであります。さうして彼女は遂に佛蘭西國民を呼び醒ましたのであります。荒廢した國土を、人心を蘇生へらしたのであります。佛蘭西はこの一少女の熱嚙に救はれたのであります。

然るに、今日歐洲戦前の傾向を見て我々は何を暗示されることとありませうか。生命のない文明、日標を失つた國民は何を要求して居るのでありませう。このすべてのものに生命を與へ、意志を與へ、眞勇を與へ、正義の祈りを與へる何ものかの力を要求して居るのであります。恰も佛蘭西がジャンヌ・ダルクに依つて蘇生した様に、今日の世界の大勢は再び彼女ジャンヌ・ダルクを要求するのであります。數年前に於いて詩人バンダイクが佛蘭西の爲にジャンヌ・ダルクを謳つたのは（詩集參照）獨り佛蘭西國ばかりではない、今日の世界總ての聲であり

ます。否我が國にも最もこの義憤の女性を要求して居るものではないでせうか。我が國の女性はこれに對して如何なる感じを以て居るものであるかを私は聞きたい。又世界は如何なることを我が國民に暗示し、如何なることを要求して居るかの一例を示したいと思ひます。目下日本に滞在中の佛人ポール・リシヤール氏は「告日本國」の一書を寄せて深くわが日本國民の自覺を促して居ります。彼は日本に囑するに正義の國、將來の國たらんことを以てして居ります。蓋し正義の國は將來の國である、世界の將來は正義の國に屬すべきである。と論じて居るのであります。

我等は今この言を聞く迄もなく、西より東より南より北より、我が國の門戸を叩いて呼び醒まさうとする世界の聲は今や既に天地に響いて居るのであります。我々は、わが帝國の爲にこれを傍觀して居ることが出来ませうか。否我々はたとひ微弱なりといへども茲に自ら先づ覺醒して、わが同胞わが國民を呼び醒すべき責任があるのではないか。殊に我が國の青年男女、この世界に唯一國の歴史をもてる光榮ある民は眞に茲にわが大和魂の神靈に覺醒して、その正義の光りによつて世界の眞相を見なければならぬ。宇内の眞理を觀なければならぬのであります。

我々は極めて微弱なるものであります。けれどもその使命は重い、これを全うするにはたゞ我々の信ずる道德意志——即ち眼に見えぬものゝ力、天祐の加護を信じて茲に衷心の祈りを捧げて起つ、この決心の外に我々の決心はない、この態度の外に我々の執るべき態度はないのであります。即ち我々はこの天地の生きたる人格に向つて我等の衷心の祈りを捧げるのに躊躇しないのであります。

我々は各自の信仰に従うて、眼に見えぬ宇宙の靈に向つてわが祈りを捧げる、その命令に従ふといふことは男女の區別、宗派の區別を超越して誓ふことが出来るものであると思ひます。即ち今我々は心に各自瞑想する所あつて各自の使命を思ひ、さうして我々の祈りが恰も佛蘭西國に於けるジャンヌ・ダルクとなつて、今世界の混沌たる傾勢に向つて、迷へる者の爲に眞に生命を與へ、心を與へ、これを正義に導くことは決して不可能なることではないと思ふのであります。否これが我々の祈りであればならない。これが我々の氣分であればならないと思ふのであります。

〔家庭週報〕第四百四十號、第四百四十二號・天長節祝賀
式上に於て）大正六年十月

女子教育改善の根本方針

—

これまでは社會は勿論、女子自身も、女子は男子と同じく公な務めを盡さねばならぬと云ふ意識を有つてをることが、甚だ薄弱であつた。これは一般の考として、女子は男子の附屬物で、一個の人格者として認められず、自身も其の自覺がなく、かくて社會國家もこれを尊敬しなかつたが爲である。其の結果は女子の高等教育不振となり、常識なく、自分自身の仕末も付けられず、又其の子に對しても、其の夫に對しても、本當の意味に於て相談對手となるとか、同情を有つて夫の事業を助けるとか、云ふことは到底出来なかつたのである。其の他色々の困難に遭遇しても、鞏固な意志を以て、これを全うする者が甚だ尠なかつた。

かうした結果は、生活と云ふことに就いて、何等の信念なく、確信なく、其の爲に或は煩悶懊惱し、或は悲觀し、或はヒステリーに罹るものが、其の數決して少くないのである。

これを救済する方法は、女子教育を大いに盛んにして、今後

の女子をして個人としても、家庭の主婦としても、國家の一員としても、大いに働きの出来る女を造らなければならぬ中にも女子に國家的人道的の觀念を吹込んで、「自分等は國家社會の一員である。人類としての一員である。單なる從屬物ではない。一個の人格體である」と云ふ意識を深く銘せしめなければならぬ。此の點が不十分な間は、今日の如き非常時に際して、女子を以てこれが補ひとするとか、男子の活動を徹底的ならしめるとか、國家の理想的發展を期するとか、さう云ふやうことは到底出来るものではない。これ今後の女子教育に際して心得べき第一點であると思ふ。

二

次に此の人間としての教育、國民としての訓練の外に、女子の職業教育をもつとく高調し、其の範圍を更に擴げる必要があると思ふ。これは今後の女子生活の爲めにも、國家生活の上からも、明かにさう言へる。何となれば人類の約半數が女子であるのに、今日の所では其の殆ど總てが男子の寄食者である。平時は或はそれでも間に合ふかも知れんが、今日の如くいざ大戦争とでもなると、男子が皆ひき上げられる、人が減る、其の爲めに事業が振はなくなり、生産力がグツと落ちる。狭い範圍

の職業教育に限られた多くの女子は、此の場合男子に代つて、其の事業を繼續することは出来ない。出来るものもあるが、重要なことなどはとても出来ない。さうした結果生産は減る、寄食者のみが殖える、と云ふことになる。而して其の爲めに國家は大なる活動障害を蒙ることゝなる。これ其の究極の原因は、女子の職業教育の有無といふことに歸着する。

然らば此の種の職業教育を如何にして施すべきかと云ふにそれは女子に對して高等専門の教育をもつと開放しなければならぬ。「女人禁制」であつてはならぬ。「千客萬來」でなければならぬのである。商業でも、工業でも、女子の手で出來さうなもの、皆開放して入學を許可すべきである。否、本當から言つと、女子の爲めの高等専門學校を設ける必要がある。斯うして置けば、平時に於ても生産力を高むるのみならず、非常時に於て、それが爲めに國家の活動を弛廢せしむることはない。言はゞ一舉兩得である。

今度の戰爭に徴するも、從來女子の職業教育が幾分なり出來てをつた國は、男子が軍隊にひき上げられても、これに代つて先づ差支なきだけの國家の活動をつゞけてをる。然るに若しこれが日本であつたならば、何百萬と云ふ血氣盛りの者が引き上げられたならば、其の後を埋め合せることが出来ないで、どん

なに困るか知れないのである。これ職業教育の擴張を以て、今後の女子教育改善の第二點とせねばならぬ所以である。

三

次には女子の人格教育を高める必要があることである。これは女子を國民の教育者とする上からも、又社會改善の原動力たらしむる上からも、極めて重要なことである。

謂ふところの人格教育とは、女子の高等教育、則ちユニバーシティーの教育である。換言すれば人文大學教育とでも言ふべきものである。其の要は人格の根柢を培養して、信念ある女たらしむることである。而してこれが出來さへすれば、これに由て國民は賢明に導かれ、社會諸種の病弊は救濟されるのである。

中にも女子をして賢明な國民の教育者たらしむることに依つて、今日の死んだ教育を蘇らせることが出來ると思ふ。蓋し今日の教育の病弊は、教育が機械的形式に囚はれて、却て兒童の發達を妨害するところにあるが、其の原因は實に教育の制度や、教授の方法よりは、寧ろこれを運用する人其のものゝ人格に在て、此の人格さへ教育者に出來てをれば、殆ど大部分の教化はこれで達することが出来るのである。而してこれを實現する最も早い道は、家庭に於ける自然的教育者とも云ふべき、女

子の人格を高めることである。

今日の師範學校は、教育にたづさはる技術者を造つてをるが、本當の教育者は造つてゐない傾きがある。隨て師範學校の卒業者たる教育技術者に依て扱はるゝ國民は、本當の人格者は出ぬ譯である。恰も枯木に花が咲かないと同じことである。

然らば自然の教育者としての女子は、如何にして造るべきかと云ふに、人格は其の内部に一定の信念あることに依て確立されるものであるから、此の信念涵養と云ふことを大いに努めなければならぬ。これ人文大學教育の必要なる所以である。隨て其の教科の如きも、哲學とか、宗教とか、又は心理學とか、さう云つた風な精神科學をも授け、これに由て精神生活を培養することに努力する必要がある。詰り一言にして言へば、其の根本を養ふ教育に努めることである。

そこで此の期待が實現されることゝなれば、社會改善もこれに依て行はれることゝなる。蓋し今の社會活動は、政治と云はず、實業と云はず、宗教と云はず、道徳と云はず、其の萬般が根本を失つてをるが、これは生活の土臺が出来てをらぬからである。換言せば信念生活が枯れてをるからである。而して國民にこれが枯れてをる間は、到底堅實なる生活、國民的大事業などは思ひも寄らぬことである。然るに若し女子教育に依て人格

が培養され、自然的教育者としての女子の人格が陶冶され、ば、これに於て男子の活動が規制され、自づと社會の改善が行はれることゝなる。これ女子教育改善の第三點として擧げねばならぬ所である。

四

最後に注意すべきは、女子の體育である。今日のところは、女子の體格はまことに薄弱なもので、學校體操の如きあるも、どうも眞から體育を歡迎する氣にならぬやうである。中にも都會の女子に體格が虚弱である。同時に肺病其の他の病魔に冒されて、命を落すものも年々多くなつて來てをる。殊に近時の如く、エフィシエンシーの問題のやかましくなつて來てをるとき、體育を忽視すると云ふ譯はあるべき筈がない。大いに健康を充實して、婦人としての活動能率を高むべきである。これ平凡なことながら女子教育改善の第四點として擧げなければならぬ所以である。

〔内外教育評論〕第十一卷第十一號〕大正六年十一月

今後の女子教育

歐洲戰爭の影響は世界の全局に互つて其の反應を求めて居る。中にも婦人の覺醒といふことはこの戰爭が明確な區劃となることであらうと思ふ。識者の間には早く戦後の女子教育について、或は又時局と女子教育問題について研究さるゝところである。が驟つて、この時代の要求に對する我が國女子教育の現狀如何を考察して見ると、この切迫せる時局に對し、日暮れて道遠き感を懷かざるを得ないのである。併しこの時代の要求は所謂間に合せものでは應ずる事が出来ない、どうしても女子の根本的覺醒を促して居るのである。

或人々は、その根本要求に應ずべく、先づ日本婦人の體格を改造しなければならぬと主張する。又或人々は、今迄の日本婦人に等閑視された科學的知識の養成が急務であるといふ。成程歐米婦人に比して、日本の婦人、並びに女子教育の任に在る者は、此の點大いに猛省しなければならぬ。併し私は茲にも一つその根本に遡らなければならぬと思ふ。

抑々時代の要求に對する女子教育の問題は最早久しい前から種々研究されつゝあるもので昨今俄かに起つた問題ではない。

然るに、その結果は常に同程度の處を往來して居るに止つて一向に進歩の見べきほどのものがないのはなぜであらうか。私は考へる。畢竟、これは女子教育の方法にのみ走つてその根本——女子自身——に於て眞の覺醒がないからではあるまいか。この意味に於て私はこの時局と女子教育を論ずるに當つても、先づ女子自らの考へ方又態度なりが變つて來なければならぬといふことを切に思ふ。然らばその考へ方の態度がどう變らねばならぬかといふと先づ、

第一は人として自覺を持つ

といふことである。男も女も、人間といふ人間が先づ知らねばならぬことはこれである。然るに今日迄の日本の女子教育は、多く女としてのみの教育であつた。それはやがて女子をして自ら「女は三界に家なき者」といふ如き考をたしむるものとなつた。今やその時代は過ぎて居る。けれどもその思想は矢張り婦人の心の根にくひ入つて居るやうである。この思想は婦人をして人形の生活、機械の生活に止らしめて、進んで人格者としての價値を知らしめないものである。自己の尊重といふことを婦人の行くべき道でないかの如く考へしめて居る。けれどもそれは大いに内省しなければならぬことである。人間はその自己

といふものについて深く考へれば考へるほど其所には動かすことの出来ない尊いものがある。これを育て、行くのが教育であり、其の進歩發展が人間の價値のある處である。若しも此處に氣付かぬものであつたならば、如何に生活の改善を施してもそれは所謂外面的の改善であつて、花ならば造花、細工ならば鍍金物に屬するものである。眞實の改善、眞實の覺醒は深く内に醒めるといふことでなければならぬ。

第二は高く理想に生きる

といふことである。いひ換ふれば天を信賴し天と共に生きるといふことである。婦人もその人格に目醒めて之を尊重するといふことは、つまり理想に目醒めたといふことである。物質的機械的の境涯を超越して絶對の力即ち天の力を信ずることが出来るやうになつたのである。これが人間本來の面目である。然しながら人間の弱點は一度その本來の面目に再生しながらも其處に直ちに直行するといふことは世間普通の人間にはなか／＼の努力である。不幸にして四圍の境遇が自分の考と逆行したり、或は又種々の方面から束縛を受け壓迫を感じねばならぬやうな時、多くの人はこの困難と戦ふ迄に早く失敗をとり、この外部の境遇を制御するといふよりも却つて之に制御され束縛される

ことである。此の如きは人間生活の外面的にも内面的にも常に起り來ることである。この際それ等の壓迫束縛を脱して、其の理想要求に向つて眞に公明正大な道を自由自在に往來するといふことが大切なことである。この時人間の本來の要求を育て、本心を指導するものはその人の信念の外はない。如何なる困難にも、如何なる誘惑にも迷はず恐れず終始一貫して行くことの出来るものは、その理想を信じ確信を保つ者にのみ與へらるゝ偉大な力である。これ即ち天の心を心とし、高く理想に生きることである。

第三は國民的人類的に自覺する

ことである。即ち國家に對する信念は勿論のこと、世界といひ、人道といふ廣い範圍に於て、出来るだけの力を盡すといふ確信を以て、すべての生活を律して行かねばならぬ。從來は「家」といふことが女子の生活範圍であつた。けれども今後の女子の生活興味は國家的に又世界的に擴大されねばならぬ。獨り興味ばかりではない、女子が盡すべき働きも男子と共に國家の進進に貢獻するもの、否國際的人道の運動にまで参加すべき時代となつて居るのである。今日の歐洲の戦争は世界の戦争である。人道と權力との戦争である。この時に當り、世界の婦人

は宇内的正義の下に永久の平和克復のために貢献し得るものでなければならぬ。世界の平和、人類の幸福を贏ち得るものは決して狹隘なる利己主義、横暴な權力意志ではなく、天地の公道に基く道徳意志である。而もこの信念を以て國際的大憲法を建設し、世界的良心を養ふものは靈性に豊かな婦人の使命である、責任である。

以上婦人が内に深く自覺し、上に高く天を相手としてその靈性の向上進歩に努力し、而もその活動の範圍は廣く世界的人類的覺醒に使命を感じるといふことが、今日時代の要求する婦人ではあるまいか。されば婦人をして其所に發展せしむるといふこと、即ちその向上の道を啓くといふことが時局並びに戦後の女子教育の方針とならなければならぬことではあるまいか。自分は今斯く信じて疑はないのである。

〔家庭週報〕第四百五十二號）大正六年末

團體的生活の價値

我が國では個人的生活——所謂利己的生活——は自分にとつて最も利益のある、又最も幸福なる生活法であるかのやうに考へられて居る傾きがあります。が私はこの見方は甚だ狹隘なる

且淺薄なる識見であると申すことを憚らぬのであります。それで私は、團體となつて又團體の一部となつて生きて行つた方が、自分の爲にも亦自分といふものが生れて來た終局の目的を遂げて行く上にも利益であるといふことを主張しその道理を訴へて置きたいと思ふのであります。

自己の擴大増加

第一、團體生活をするといふことは己を——自分といふ個人を——増加することである。即ち自分一人のこと、自分一人前の仕事を團體的にするといふことになる、それが百人前にも千人前にも萬人前にも、否限りなく多くの自分といふものを増加して行くことが出来るのであります。一人の自分といふものがこの團體的生活によつて無數無限の澤山な自分になることが出来るといふことはつまり自分の力が限りなく展びるといふことになるのであります。

いふ迄もなく我々個人の活らく程度、その仕事の範圍といふものには大抵限りのあるものであります。其の限りのある力を以て如何に努力しても如何に集注しても、又それが如何に偉い人であるにしても、一個人でする仕事の範圍といふものは忽ち力の制限といふことに行き遭つてしまふものであります。され

ば、假令茲に大目的を立て、大理想を描いて居る人があつても、個人のみだけでは到底實現することは六つかしいといふことにもなつてしまふ。殊にそれが大目的大理想といふことになればなるほど、其の仕事はいよ／＼複雑になつて来るから到底自分一人の力だけでは、目的はあつてもそれを成就することは出来ない。理想は立つてもそれを實現することは出来ないといふ事になるのであります。つまり我々の人生行路は其所まで行き詰つてしまつて、こゝより向ふへは進むことが出来ないといふ制限に出遇ふのであります。茲に於て人間はどうかしてこの制限を破つて無限の力に生きたいといふことを要求して来るのであります。此の活動を極限される關門を破壊して、宇宙の無限なる源泉と連つて無限の發展を遂げようとする要求が起つて來るのであります。即ち自我を擴大し自我を増加するといふ必要が起つて來るのであります。

團體的生活の必要

この自我を擴大するといふことは、自分を幾人にも増し自分の手を増加するといふこと、即ち活らく力を各方面に展ばし、又その活らく腕の數を無限に増さなければならぬといふことであつて、又さうしなければ自分の意志を遂げ理想を實現すると

いふことが出来ないやうになつて居るのであります。團體的生活の必要はこゝに起るのであつて、即ち我々は多くの人を其の目的に向つて指導し、さうして多くの同志の人々を拵へて其の同じ目的に共同せしむる所の組織を作ることに依つてこの目的を達することが出来るのであります。

私共が無限の希望を持ち無限の發展を希望して居るからには、どうしても其の力が無限に發展して行かなければならぬ。その無限に人格を擴大するといふことは、人を指導すること、又其の人々と組合を作り協同するといふ活らきより外に道はないのであります。我が國には千手觀音といふものがあります。あれは人間のこの理想を表したもので、つまり千本の手を備ふるといふことは自分の活らきを多くすること、自我を擴大するといふところの要求を表象したものであります。我々は、この千手觀音によりて表されたる理想を自分の上に表現することが出来るのであります。この非常なる力を獲得するの道は我々が團體生活を組織することによつて得らるゝのであります。

この團體の力が自分の力となり、自分を増すものであるといふことを最もよく表して居るものは今日の世界の戦争であります。即ち彼の獨逸が——世界の意志に相反したる權力意志を標榜して、而も何故に斯くの如く強硬の態度を持し得るか、とい

ふことは、これ全くその團體の力が強いといふことに歸するの
であります。彼の獨帝は權力意志を以て全國民を指導する――

其の意志は皇帝一人の意志に出で、千萬人の意志となり、其の

活動は千萬人の活動にして而も一人の手足の如く一致して居る

――この故に、皇帝の意志はよく千萬人の兵を動かし又その六
千萬人の國民を動かすのであります。即ちこの場合には獨帝の
手は六千萬といふ數に増えてその目的を遂げつゝあるのであり
ます。この組織的活動に對抗するには如何に正義の意志を以て

しても個人ではとても駄目である、又少數では不可能でありま
す。即ち獨逸の權力意志に反對して立つた聯合軍は正義の意志

の聯合を作つて終局の勝利に向つて戰つて居るのであります。

が併し露西亞は國內の事情から戰ひの中途にしてその戦意が崩
れて來た形である。即ち正義の意志の手が其所だけ活らなくな
つたのであります。否露西亞だけに止まらずこの形勢を捨て、
置くと結局正義の意志の活動を減ずるわけである。さうす
ると或は世界の破壊を來すことになるから、米合衆國はこの形
勢を見て世界の正義の爲に聯合したのであります。即ちこの場
合の大統領ウイルソンの意志は米兵一千萬の手むしろ米國民一
億の意志活動となつて、聯合國の正義の意志の手を増したわけ
であります。さうして或手は此の戰爭に對する彈藥を作り、或

手は飛行機を作り、又或手は糧食を供給するものとなつて、こ
の大團體を組織し、この大活動の終局の目的を成就せんとし
つゝあるのであります。

これは現今世界の最大な運動でありますが、併し一部分に組
織する自治機關――例へば學生々活の共同たる團體生活といふ
ものも――その原理に於て違ふ所はないのであります。若し其
の團體の指導を理想通りに實現することが出來たならば、否そ
の原理に漸次近づけて行くことが出來て行くならば、その指導
者と又その團體の各個人は、相互に各自の人格を増大し各自の
手を増したといひ得るのであります。

これ修養の目的

この團體生活を組織するといふことの目的は唯自己の増加を
目的とし、自己の手を増すといふことだけに止るものではな
い。此所に誤解があつてはならないのであります。私共は私共
の最大目的を遂行しようといふ根本目的を持つて居る、我が帝
國否世界を改善しようといふ大きな目的を抱いて居ります。併
し斯ういふ目的はどんな偉い人でも一人の力でこれを仕遂げる
といふことはどうしても出來ないことであります。これを仕遂
げる道は唯各自が其の目的に向つて指導者の覺悟を持ち、さう

して自分の人格、自分の理想を多くの人々に傳へて多くの自分を作るといふことに在るのみであります。茲に初めて其の目的が成就されるのであります。

要するに自分だけの孤立した力といふものは實に小さく又狭いものであるから、その制限を破るといふことが常に我々の修養の目的となつて居らなければならぬと考へるのであります。其の力こそ如何なる難事をも成就せしむる力であります。

永久の理想實現

今一つ我々人間の目的といふことについて考へて置かねばならぬことがある。それは我々人間の目的は永久のものであつてそれは無限に延長して居るものである、といふことを忘れてはならないのであります。然るに人間個人といふものゝ生命には制限がある。人生七十古來稀なりといふ言葉さへあります。が、假令それが百歳或は百歳を越した處が、これを自分の目的が宇宙の大生命と共に永久無限のものであるのに比ぶれば實に僅少な年でありませぬ。其の爲す所も亦極めてはかないものであつて、到底満足し得らるゝものではないのであります。

この永久の目的を實現せんとするものはどんな自分であるかといふと即ち團體の自分であります。例へば我々の女子大學櫻

楓會といふものがある、其の團體に我々の意志は残つて居る。一つの生命は今千七百幾十名といふ數に増して居る。其所に我々の意志は永久に續き其の目的は永久に實現して行くのであります。けれども、若しこれが自分一人孤立するものであれば、自分一人の力と生命の制限を越えることは出来ないであります。一個人の力を縦に延長するものも又横に擴大するものも先づ團體的になるといふより外に道はないのであります。この團體的になるといふことが取りも直さず自分の仲間を増すことであつて、他の言葉を以ていへば自己の人格の擴大自我實現であります。故にこの道を離れて人間の理想を遂げて行くといふ事は出来ないであります。從來我が國の人々に考へられて居つたやうに、個人的生活が利己の最上のものではなく、否これ程自己實現に對して不忠實な生活はないので、人間は團體的生活に依つて初めて自己を擴大し又延長して行くものであるといふことを忘れてはならぬのであります。

適材を適所に置く

團體生活の第二の利益は適材を適所に置くことが出来るといふことであります。適所に適材を得るといふことは大目的完成の上から見て必要な方法であることはいふ迄もないことであ

るが、これを個人發展の方法として見ても又實に必要なこと、言はねばなりません。即ち自分の生れついて居る所の自己の天分といふものも適當な境遇に生きて初めて成長發展するものであります。故にこの適材を置く適所といふもの、即ち適材が養はれる所の適切な境遇といふものはこの團體的生活の關係に依つてのみ得られるものであつて、團體を離れて外に自分の適所を見出すことは出来ないであります。團體を離れた一個人といふものは恰も水を離れた魚のやうに、又幹を離れた枝のやうに、到底その自己の天才を生かして行く道は杜絶して居るのであります。天才は團體的生活に依つてのみ發展して行くことが出来るものであります。然るに自己の天才を展げん爲に、自ら自己の生活に極限を加へ、團體的生活を離れて個人的に生活して行けば深く自己の根柢に突き進み、又その天才を發揮するかのやうに考へて居る人がありますが、これはその生命の半面をみて他の半面を見ない盲目者であるといはねばなりません。

力の消耗を防ぐ

第三の利益は、人間の神経の消耗を防ぐ所の効能があると言ひ得るのであります。我々人間は活動の原動力を神経系統の中に貯へて居る者であります。即ち宇宙の材料を我々の神経の中

に消化し貯藏するのであります。その力を消耗し其の力を使用して我々の人格を實現して居るのであります。

然るに人間の能力には限りがある。この神経の力には限りがあるのであります。さうして我々の仕事、我々の脳の働きには限りがない。この限りなき仕事を限りある力——神経——を以て應じて行かなければならぬから人間は神経衰弱を來すのであります。如何なる人でも自分一人の力を以てその自分の永遠の目的を果さうとするならば其の精力を過勞して遂に神経衰弱に陥ることを免れないのであります。たゞこれを救ふものは人間が團體を組織しその仕事を分業にして、さうして各自の適材を適所に表して行くといふことになるのであります。さうすれば自分は自分の適所に集注することが出来て、而も他の部分は其の部分に適材の人の力を以て補ひ成就せしめて行くのであります。言葉をかへて言へば、我々人間は何もかも自分の頭で考へてさうして研究もし發明もして、自分の力のありたけを有効にするやうな方法を見つける事は出来ない。然るに今日は人間の生活が團體的となつて分業の活らきとなつて居るから自分の適材によつて出来る丈けのことに集注し、出来るだけのことには神経を消耗して、其の他の部分は他人の頭で出来たものを以て補ふ、即ち自分の生産と他人の生産とを交換して、さうして此の

限りなき要求に應じて行く事が出来る道をとるのであります。

斯くの如く、人間の各々の自己はいと小さいものであるが、これが有機體を組織して生命ある團體となると、其の各自は全體の一部となつて全體と協同行くことになる。そこで限りある力を以てして限りなき要求に應じて行く方法となるのであります。

眼界を廣くする

第四には、我々の眼識には限界があります。然るに我々の見なければならぬ範圍は無限に廣く我々の洞察しなければならぬ世界は無際限であります。我々はたゞ有機的關係に依つてのみこの無限の世界に自分の眼界を無限に擴げて行くことが出来るのであります。即ち自分の見る所の眼を無限に増加して行くことが出来るのであります。この關係がよく出来れば我々は遂に宇宙を観ることが出来る。さうして社會全部を観察し、その各方面を洞察することが出来る、其所に比較的完全に近づくことが出来るのであります。寔に我々が自分一人だけの見た所を以てものを定め又自分の頭だけで拵へたものを、團體的に見たり考へたり構成したりするものに比べると、遙かに劣り、遙かに狹隘であることに氣付くのであります。此所に共同生活、有機

的關係を以て生活して行くといふことは自分だけ獨立的にして行くといふよりも慥かに有効であるといふ明らかなる證據を見ることが出来るのであります。

能率増進

第五の利益は、團體は原動力を刺戟し原動力を増加し原動力をして効力あらしめるのであります。

この原動力の刺戟は相互的關係から起つて来るものであります。即ち動と反動から起つて来る熱度の増加であります。其の相互の關係が發動機を生み出す作用となるのであつて、之を一言でいへば、この我々人間が團體生活するのは我々の能力を増率するといふことになるのであります。

この能率を高めることに二つの方面があります。その一つが即ち原動力を増加することであつて、これは我々が最も要求して居るところの大事なものであります。さうして、内にこの力が充實し益々旺盛になつて來ると、恰も化學の作用に起る動と反動——即ち化合物作用——によりて熱を起す様に、矢張り我々人間の間にもこの動と反動の作用によつて、宇宙のあらゆる原動力を其所に引き寄せて來るのであります。これを詳細に論及して行くと所謂宇宙の愛の關係といふこともこの活らきから起

るのでありますが、此所には唯この關係があるといふことに止めて置きます。

もう一つの方面は、その力に無駄をしないといふこと、即ちその力が最も多くの効力を擧げるやうにその力を使用するといふことになるのであります。その力をよく其の目的に向つて集注し目的に向つて効力あらしめるといふことがこの團體生活によつて最もよく行はれることになるのであります。

調節と平均

第六、團體生活によつて相互の受ける利益は、互に生活を調節さるゝといふことに在る。即ち強いものと、弱いものとが互に扶け合ひ互に利益を交換する、さうして全體の生命を全うして行くことが出来るのであります。

尙この調節といふ事が力の浪費と生活の危険とを防ぐ大切な活らきをなすものであることを言はなければなりません。即ち各部の活らきの交換を適宜になさしめるといふ事は、恰もすべての機械に調節器といふものがあるやうに、我々の生活にも尙この調節といふことが必要なのであります。それは團體にも、又個人の人格の各要素にも、或は身體の各機關にも過不及といふことがある。これを調節しないと直ちに力の浪費が起つて來

る。病氣、死、混亂といふことは皆この調節の出来ない所から起つて來るのであります。

其の原理は、力といふもの、生命といふものは、常に音律的に常に流動して止まないものである。さうして各個人、各機關、各部分には各獨特の一つの力が活らいて居つて非常に其の力の集注する一點がある。さうして其の力の餘力は之を他の不足の部分、弱い部分に移して行つて其の部分助け又其の反動を呼び起すのであります。即ち各部或は各個人が全體の爲に特殊となり、その特殊を以て全體に奉仕して行くのであります。又全體は各特殊の爲に、各個人の爲に、又各部分の爲に奉仕し又犠牲を拂ふことになるのであります。其の活らきを起して行くのがこの調節機關の力であります。

調節の今一つの目的はものゝ平均をとるといふことであります。即ち各部が各自の職分を丁度適當に全體に關係して行かなければならぬ。でなければ生命の危機に勝利を得るといふことは出来ないであります。この道理は私は自分が病氣に罹つた時によく實驗することが出來たのであります。誰でも同じやうにこの經驗は感ずることであらうと思ひます。つまり團體の爲に活らいて居ると思ふことは却つて一部分の爲であつて、その一部分の爲に全體が犠牲となつて活らくといふやうな事は

度々あるのであります。身體の一部分が病氣に罹つたといふやうな場合に於て身體の他の部分のすべての活らきは其の一部を治療する爲に集注されるのであります。つまり一部の爲にその他の總てが犠牲となり奉仕するのであつて、其所の活らきの平均を保たしめるものは調節の活らきである。人間の身體の活らきでいへば意志は即ちその調節作用を司るものであります。

この調節といふことが出来ないとき全體の爲にも部分の爲にもならない、即ち團體の爲にも個人の爲にもならないのであります。されば、團體となるといふことは、其所に必ず調節するといふ活らきがあつて、個人を助けつゝ又團體を構成して行くものでなければならぬのであります。これが矢張り我々の團體生活の利益とする所であつて、即ち個人が徹底して自己の目的を貫徹して行くといふことは矢張り團體生活を立派に成し遂げることにあるといふ道理を明らかに證明するのであります。

〔家庭週報〕第四百六十七號、第四百六十九號、大正七年二月

わが卒業生に告ぐ

量よりは品質

本年度の卒業期に於きまして我が國の各大學及び各中學、各

高等女學校より輩出する卒業生の總數は實に數萬の多きに達しますが、これは實に、我が帝國が益々要求するところの有爲の人物を新たに得るわけで、實に國家にとつて喜ぶべき慶事と申さねばなりません。併し吾々は唯この數の多きを以て満足することは出来ません。今後我が國の新時代の運命を支配するものは數の多いといふよりはその品質の如何によるのであります。故に今日卒業生の實力價値を調べるのに試験の點數を云々するのは間違つて居ります。のみならず、我が學風を毒するの甚しいものであるといふことを吾々は前より感じて其の改善に努力して居る所であります。

今假りにこの數萬の新卒業生の價値を此の標準即ち學生の實力品性人格等によりて査定を致したならば、私は次ぎの三種類に分類されることと思ふのであります。

修業目的の三種類

その第一種に入る卒業生は我が國に於きましては最も數の多きもので、且品質の最劣等なるものであります。私はこれを稱して、街學の人と言ひたい。即ち學問を街ふ人、學者ぶる人といふので、昔の人はこれを腐儒といつたのであります。此の種に屬する學者は規定の試験を通過して學者の看板を得ようとす

る、さうして其の實は學者の皮を着た偽善の生活、無氣力の生活を餘儀なくする人々であります。彼等は其の頭腦に消化しきれぬ程多くの學科目を取り、さうして知識の分量を可成り多く詰め込むことは、丁度食ひ合せの悪い雜多の食物を過度に貪り食する人の様に、互に調和連絡せぬ知識を唯散漫と詰め込むのであつて、其の材料は人格の血となり肉となり骨となるのではなくして、却つて全人格の肺腑を破り不健全なる病的黴菌を製造するものとなるのであります。斯ういふ所から危険思想を生み惡傾向を作り出すのであつて、却つて學問が身を損ふ例は少くないのであります。實に悲しむべきは我が國大學の學士博士といはるゝ人々の中から、今日最も忌むべき犯罪者を簇出するといふ状態であるのは之皆學問の中毒であります。女子の學府にも亦この種の學生を出して意志薄弱なる男子の弱點をいよゝ助けて、その虛榮心の満足を得ようとする者のあることを屢々新聞紙上に見るのであります。これ等が皆事實とすれば實に容易ならぬ事であります。

次に、第二の部類に屬すべき學生を私は知力の人といひます。この種の人には成るべく少數の學科目を選びその分量を減じて學習の消化力を十分に與へる。即ち散漫たる知識を丸呑みにすることを排斥して成るべく思考力、研究力を養ふ事に

重きを置く、苟も學習の知識はこれを日常の生活に有効ならしめねば止まない。其所には何か自分の働きを加へねば満足が出來ないといふのであつて、此の種の學生の學問の目的は研究と有効といふことに置くのであります。

さて、第三の部類に入るべき人を私は意志の人即ち人格の人といふ。この人の知識は深く徹底して其の根本は哲學に到達し、高く向上して宇宙の神祕的正義に接觸して居るのであります。この人の目的とする所は人格の創始力であり、支配力であり、又境遇の開拓力である。即ち意志の訓練又意志の發展に努め、有効なる觀念に生き、常に生きた知識を己の目的に集注することを學問の眞髓として居るのであります。

私は今日の我が帝國に於ける數萬の卒業生を前述の三種類に分類したのであります。さうして我が校創立以來の千七百名の卒業生諸子は果してこの三種類の中の何れの部類に屬する價値を有する人々であるかを思ふのであります。

本校の主義方針は諸子を人として國民として養成するに在るといふ事は、つまり曩きに所謂意志の人を作るといふ目的にあるのであります。故にたとひ學科の成績即ち試験の點數は上位を占めても、其の人の常識、品性、素行に於て缺くる所があれば即ち人格に於て不備の點があつたならば、其の人を下位に置

くといふのみならず、其の爲に卒業の出来なかつた人も毎年幾分かづゝあつたのであります。

新學制建設の努力

斯かる主義方針の下に指導されて人となつた我が校の卒業生にして、かの銜學の人として満足して居る事は出来ない筈である。私は信ずるのであります。然らば第二の部類に屬する人、即ち知力の人として甘んじ得るかどうか、我が校は昨學年から我が教育を一層有効ならしむる爲に新制度の實行に着手し、成るべく學科目と教授時間を減じ、生徒各自が自動的に思考力を養ひ、研究力を鍊磨して即ち研究的生活の實行に努めて來たのであります。故に第十五回卒業生並びに附屬高女第十七回生が従前の舊習を改め、新學制を建設せん爲に努めた努力は見逃すことの出来ない事實であります。さればその努力相當には知力をも養うたといふ經驗を積んだ事は疑ふことの出来ぬ事實として申してよいのであります。併し吾々は唯この結果を得たのみで諸子を卒業生として出すには不十分であると思ふ。

何となれば我が校の教育方針及び目的とする所は、單に知力を養ふといふことではなく、前述の第三種に屬する人、即ち意志の人を作るといふことに在るからであります。

さうして今吾々は此の目的を達して、即ち諸子を人格の鍊磨された人として、又品性の完備した人として卒業の承認を與へることが出来るかどうかといふことを反省したならば、容易に然りといふことは出来ない。併し私は唯これだけのことを言ひ得るのであります。

それは今年の卒業生は意志の萌芽を作ることが出来た、或は開かんとする意志の潜勢力を内に養ふことが出来た。さうして今後その意志を鮮明に、永劫に發展することの出来る原動力を内に貯へることが出来たといふことであります。諸子も亦この自信を抱くことが出来るであらうと思ふ。

此の私のいふ意志の萌芽とは、即ち意志の眞髓といふべき人格が相當に發展したといふことであります。我が國の古き諺に、「梅檀は二葉より香し」といふ事がありますが、人格のある人とはその萌芽の時から、その眞髓を發揮するといふ事を永劫に杜絶しないといふ自覺ある人であらうと思ふのであります。殊に本年の卒業生諸子とその最終の學期に於て研究したる正義の神祕は絶対の意志と人間の意志と相融合して、共通普遍の目的の爲に活動せんとする所の状態、即ち根本自我の實現である。

即ち天地の公道に基く正義心、又正義に反對する不正と戦ふ

反抗力であつて、絶對の善意志の活動であります。この絶對の神祕的活動は諸子の人格の萌芽と離るゝことの出來ぬ關係を保つて居るものであります。「シエリ」の詩に

「泉と河とは互に混交し、河と海とは互に交渉するが如くに、天の神風と吾等の情操との交通は永久絶えることなし、然らば何故吾と爾と然らざるを得んや」（意譯）

と是實に意志の眞髓を能く表したるものと謂ふべきである。

意志の第二要素

意志の第二要素は、將來に生きる人格の要素即ち人格が將來に向つて秩序的階段的に向上發展を遂げ得る力の要素であります。前述の古語を以ていへば「梅檀は二葉より香し」といふその「香し」は意志の第一要素であつて、この二葉が永き年月を経て成長發展する。その生きて行く假定は即ち意志の第二要素であります。私は先日迄病後靜養の爲熱海に居りまして、朝夕に海邊を散歩する際にさまざまなる自然に接しましたが、其中にも鬱蒼たる大樹——千年以上にもなるといふ楠——を見まして、實にこの天地間に漲る意志の力といふことを、感ぜずには居られなかつたのであります。其の根は深く地に入り、幹は強大に枝を張つて如何なる風雨にも泰然として立つて

居る有様は、恰も幾多の困難に堪へ來つた勇者が今後尙如何なる障碍に遭遇しやうとも、よくこれに堪へ得る意氣と又その態度を示して居るものゝやうであります。吾々人間がその意志即ち人格を育てるといふことについては、恰も梅檀が二葉の頃からその香氣を保つて、而もこの喬木になるまでその香ばしき香氣を益々發揮して來るやうに、吾々の人格は年を重ねて益々發展し、その生活に於て益々發揮せねばならぬのであります。この向上する勢力即ち人格發展の勢力を贏ち得る人でなければ意志の人といふことは出來ないのであります。

我が國では「人生五十耻無功」といふ言葉がありますが、これは稍陳腐に屬するもので、少くとも「人生百歲耻無功」と改めねばならぬと思ひます。何となれば今日人間五十歳にしてよくその功を成し遂げる、言ひ換ふればよくその人格を完成するといふことは出來ないのであります。この意味に於て、人間の壽命百二十五歳説はひとり大隈侯爵ばかりではなく當然さうあらねばならぬ事でありまして、若し百歳以下で死ぬといふやうな事があればそれは寧ろ不自然なことで申さねばなりません。まして五十歳にして功を成すことは出來ない。その短い生命で人生を全うする事は出來ないのが當然でありませう。これは只一片の空論ではないのでありまして、この人間の壽命に就いて

研究を重ねた學者は醫學界にも科學界にも少くないのであります。でその事實を證明する材料となるものも少くないのであります。まして、奧太利の或る醫科大學教授の研究の公表に依りますと、ブルガリアの國民は六百萬人の内百歳以上に達して居る人が三千八百人もあるといふ事實を擧げて居ります。この外にも向この種の研究がだんだん有力なる事實を擧げつゝあります。が、今私の言はんと欲する所は唯その長命をするといふ事のみが目的ではないのであります、その與へられた壽命を保つ目的は即ち意志の完成、人格の成長といふことにあるのであります。

吾々が與へられた壽命を保つといふことは即ち意志で意志し、意志で行為し、意志で理想し、意志で實現し、意志で錬磨し、意志で研究し、意志で感情し、意志で活動し、意志で發展するといふこと即ち永久不休の意志の成長が遂げ得られてこそ最も効力ある人生を生活する人であります。

永久の修養

この標準から考へますと、わが卒業生諸子が過去に於ける學生中の人格修養といふことは實はその萌芽を見出したといふまでの事で、この萌芽の成長期發育期は寧ろ今後に俟たなければならぬのであります。然るに卒業は恰も修養の終りであるかの如く考へ、これと同時に今迄の修養が下火になつて來るといふことは大いに考へなければならぬ事でありませう。

意志は人生を通じて宇宙的に永久的に成長發展すべきもので、この成長を遂げ得る人でなければ意志の人といふ事は出来ないのであります。生きた人格といふことは出来ないのです。

第十五回卒業生が今學期の結論會に於て告白なさつた各自の覺悟、又十五回生の意志として神明に誓つたその意志の萌芽はやがてその理想に向つて成長せんとする櫻楓樹の双葉に過ぎない。即ち意志の第一要素たるに過ぎないのでありますけれども、この第一の要素に今いふ第二の要素たる成長の力を加味して初めて完全なる意志を完成することが出来るのであります。諸子がこの目的を達する爲には今後幾十年間否永久的にその意志が訓練されて行かなければならないのであります、若し未だこの意志人格の完成の出来ない内に早く老衰して其の進歩成長が止まるやうなことがあれば、それは天死した人格であるといはなければならぬ、故にこの意味の生涯を全うするにはどうしても長壽を保ち、さうして老いて益々盛んなる修養と努力を要するのであります。

人生を百歳に延ばすといふことは非常に我が國婦人の覺悟を要することでありませぬ。即ちこれは遺傳から矯正しなければならぬことでありますが、これを要するに我が國に於て昔からいふ所謂厄年に對する因襲的觀念又は日常の病氣などに對する考も、之を以て徒らに意氣銷沈せしむるなどのことなく、大いに意志訓練の一方法としてこれに抵抗して行かなければならぬ。

私はこの意志訓練について二つの實行の要素があると考へるのであります。即ち長生してこの世の務めを完うするか。他の一は使命に應じて斃るゝか。この二つの道であります。恰も木の實が熟して落つるが如く、この人生を全うして終るか、或は又召喚あれば喜んで犠牲となり斃れて止むの決死者たるか、この二つの道をとる人々をこそ眞に意志の人といひ得るのである。

これは半ば理想のやうであるけれども、又實は生活の事實であるのであります。吾々は必ずこの意志の訓練方法をとつて、個人的にも又團體的にもその完成に努めなければならぬと思ふのであります。さうして今日卒業さるゝ所の諸子が斯くの如くにして各自の使命を全うせられんことを切望して今日の告辭といたします。

〔「家庭週報」第四百六十一號〜第四百六十二號〕大正七年四月